

葵

1 なをわれにつれなき人の御心をつきせずのみおぼしなげく
 (三三・317)

我を思ふ人を思はぬむくにやわが思ふ人の我を思はぬ

(古今集卷六、雑体、誹諧、二四、題しらず 読人しらず、
 古今六帖第四、雑の思、三六五) (奥) (紫) (異) (河) (孟)

(屋) (岷) (湖) (引) (新) (余) (事) (集)

2 おはよそ人だにけふのものみには大將殿をこそは (三六・2・320)

君が名の立つにとがなき身なりせばおほよそ人になくてみ
 ましや (拾遺集卷三、恋、七〇、女のもとに遣はしける

藤原忠房朝臣) (拾) (新)

3 ささのくまにだにあらねばにや (三六・10・322)

ささの隈ひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む

(古今集卷三、大歌所御歌、一〇〇、ひろめの歌・万葉集卷十

二、三六、)「ささの隈」駒とどめ駒に水かへ我よそに見む」

(釈前) (釈宮) (釈書) (奥) (紫) (異) (河) (弄) (第三句)

ミ、(二)、(細) (第五句ノミ、(休) (紹) (孟) その影をみ

ん、(屋) (岷) (湖) (引) (新) われよそにみん (結句、

(余) (全) (対) (事) (大) (評) (集)

4 かけをのみみたらし河のつれなきに身のうきはどぞいとし
 らるゝ (三八・2・322)

恋せじと御手洗川にせしみをそぎ神はうけずぞなりにけらし
 も (古今集卷十一、恋、五二、題しらず 読人しらず・伊勢
 物語、二四) (孟) 神はうけずも、(岷) 神はうけずもなりに
 けらしな

5 又あまなどの世をそむきけるなどもたうれまどひつゝ (三八・
 10・323)

世を海のおまとし人を見るからに目くはせよとも頼まるゝ

かな (伊勢物語、一五) (岷)

6 かざしけるころぞあだにおもほゆるやそうじ人になべてあ
 ふひを (三六・14・326)

① 行きかへるやそ氏人の玉聲かけてぞ頼むあふひてふ名を

(後撰集卷四、夏、二六、賀茂の祭の物見侍りけるを女の車に
 いひいて侍りける 読人しらず) (花) (弄) (休) 行き

かへり、(紹) (孟) (岷) (湖) (引)

② ゆふだすきかけてもいふなあだ人のあふひてふ名はみそぎ
 にぞせし (後撰集卷四、夏、一三、かへし) (花) (紹) (孟)

(岷) (湖)

7 よの人ぎゝも人わらへにならんことゝおぼす (三六・10・327)

① よろづ代と契りしことのいたづらに人笑へにもなりぬべき

哉 (後撰集卷六、雑二、二四、病して心細しとて大輔につ

かはしける 藤原敦敏) (拾) (新) (余)

② 今さらに老の袂に春日野の人わらへなる若菜つむ哉 (中務
 集、二八六、朱雀院の御時歌めすに奉る) (拾) (余)

8 つりするあまのうけなれやとおきふしおぼしわづらふけにや

(二五11・327)

伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定めかねつ
る〔古今集卷十二、恋一、五六、題しらず 読人しらず・古今
六帖第三、思ひわづらふ、三六五〕〔釈前〕伊勢のうみの…

さだめかねぬる、〔釈宮〕〔奥〕〔葉〕〔異〕〔河〕〔入弄〕、
〔一〕さだめかねぬる、〔入細〕、〔休〕伊勢の海、〔紹〕〔孟
〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
9 さだめかねたまへる御心もなぐさむと〔二五12・328〕

伊勢の海に釣する蟹のうけなれや心一つを定めかねつる
〔古今集卷十二、恋一、五六、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、思ひわづらふ、三六五〕〔細〕〔第二句ノミ〕

10 袖ぬるゝ恋おとかつはしりながらおりたつたこの身づからぞ
うき〔二五11・330〕

① つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふよしもな
し〔伊勢物語、一六・古今集卷十二、恋三、六六、業平朝臣の
家に侍りける女のもとにのみて遣はしける 敏行朝臣・敏
行集、一五四、業平の朝臣の家の女に遣し、〕〔袖のみひちてあふ
て〕・古今六帖第一、雨、三三六、敏行、〔袖のみひちてあふ
由もなみ〕・同第四、涙川、三三〇、敏行、〔袖のみひちて〕
〔孟〕〔湖〕〔新〕袖のみひちて

② 浅みこそ袖はひづらめ涙川身さへ流ると聞かばたのまむ
〔伊勢物語、一六・古今集卷十二、恋三、六六、かの女に代りて
かへしによめる 業平朝臣〕〔孟〕〔湖〕

11 山の井の水もことほりにとぞある御てはなをこゝらの人の中

にすぐれたるかしよみ給ひつゝいかにぞやもある世かな心も
かたちもとつゝにすつべくもなく又おもひさだむべきもな
きをくるしうおほさる御かへりいとくうなりたれど袖の
みぬるゝやいかにふかゝらぬ御事になむ〔二五11・330〕

① 悔しくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみぬるゝ山の井の水
〔古今六帖第三、山の井、三三六〕〔釈前〕〔釈宮〕〔釈書〕〔奥〕
〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔一〕〔細〕、〔休〕悔しく
も、〔紹〕〔屋〕くみそめていまぞくやしき、〔岷〕〔湖〕〔引〕
〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

② 山の井の浅き心も思はぬにかげばかりのみ人の見ゆらむ
〔古今集卷十二、恋三、三六五、題しらず 読人しらず〕〔孟影
ばかりなど

12 袖のみぬるゝやいかにふかゝらぬ御事になむ〔二五14・331〕

いつのまに恋しかるらむ唐衣濡れにし袖のひるまばかりに
〔古今集卷十二、恋三、三六五、人のもとより眺かへりて 閑院
左大臣〕〔孟〕

13 あさみにや人はおりたつわがかは身もそばつまでふかき恋
ぢを〔二五12・331〕

① 浅みこそ袖はひづらめ涙川身さへ流ると聞かばたのまむ
〔伊勢物語、一六・古今集卷十二、恋三、六六、かの女に代りて
かへしによめる 業平朝臣〕〔孟〕〔岷〕〔全〕〔対〕〔大〕〔集〕
② つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふよしもな
し〔伊勢物語、一六・古今集卷十二、恋三、六六、業平朝臣の家
に侍りける女のもとにのみて遣はしける 敏行朝臣・敏行

集、一三四四、業平の朝臣の家の女に遣し、「袖のみひちて」・古今六帖第一、雨、三三六、敏行、「袖のみひちてあふ由もなみ」・同第四、涙川、三三六、敏行、「袖のみひちて」

〔岷〕

14 物おもひにあくがるなるたましひはさもやあらむとおぼしゝらるゝことも (三六六・331)

① 思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えばたま結びせよ (伊勢物語、三〇四) 〔新〕夜ふかくもえは、〔事〕

② 物思へば沢の蛸も我が身よりあくがれ出づる玉かとぞみる (後拾遺集卷三、神祇雑六、二六四、男に忘られて侍りける頃

貴ぶねにまゐりてみたらし川に蛸のとび侍りけるを見て詠める 和泉式部) 〔大〕集

15 げに身をすてゝやいにけむとうつし心ならずおぼえ給 (三六六・331)

13 身を捨てゝ行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり (古今集卷六、雑下、三七、人をとはで久しうありけるをりにあひうらみければよめる 躬恒) 〔釈前〕いきやしにけん、〔釈宮〕釈書〔奥〕紫〔異〕〔河〕〔二〕〔細〕〔引〕

〔和〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔余〕いにやしにけん、〔弄〕〔第二句ノミ〕

「いにやしにけん」〔屋〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

16 うつし心ならずおぼえ給 (三六六・331)

① 梅の花木つたひちらす鶯のうつし心も我が思はなくに (古今六帖第六、さくら、三五四、人麿、「桜花」) 〔河〕〔休〕

〔孟〕〔湖〕〔余〕

② ますらをのうつし心も我は無し夜昼といはず恋ひしわれば (万葉集卷十、三三六・古今六帖第四、恋、三三六) 〔拾〕

〔余〕

③ うつせみのうつし心も我は無し妹を相見ずて年の経ぬれば (万葉集卷十、三三六) 〔拾〕〔余〕

〔万葉集卷十、三三六〕

④ こちたくはかもかもせむを石代の野辺の下草われし刈りては (万葉集卷十、三三六、一に云はく、くれなるのうつし心や妹にあはざらむ) 〔拾〕かにかくせんを紅のうつし心や

いもにあはざらん、〔余〕くれなるのうつしこゝろやいも

にあはざらん

⑤ うち日さす宮にはあれど鴨頭草の移ろふ心わが思はなくに (万葉集卷十、三三六) 〔拾〕〔余〕うつしこゝろは

⑥ 百に千に人は言ふとも鴨頭草の移ろふ情我持ためやも (万葉集卷十、三三六) 〔拾〕〔余〕うつしこゝろは

⑦ いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ごとにして (古今集卷十、恋四、七二、題しらず 読人しらず・猿丸

大夫集、二五〇) 〔拾〕〔余〕

17 つれなき人にいかで心もかけきこえじとおぼしかへせどおもふも物をなり (三六六・332)

① 思はじとおもふものをおもふなり思はじとだに思はじやなぞ (未詳) 〔釈前〕〔釈宮〕いはじといふもこれもいふなり、〔奥〕、〔紫〕〔異〕〔二〕〔休〕思はじやさは、〔河〕、〔弄〕

〔初ノミ〕、〔細〕〔紹〕〔孟〕②、〔孟〕④いはじといふもいふ

はいふなり、〔屋〕つらきうき世にすみかねにけり、〔岷〕

③ 思はじとおもふものをおもふなり思はじとだに思はじやなぞ (未詳) 〔釈前〕〔釈宮〕いはじといふもこれもいふなり、〔奥〕、〔紫〕〔異〕〔二〕〔休〕思はじやさは、〔河〕、〔弄〕

〔初ノミ〕、〔細〕〔紹〕〔孟〕②、〔孟〕④いはじといふもいふ

はいふなり、〔屋〕つらきうき世にすみかねにけり、〔岷〕

④ 思はじとおもふものをおもふなり思はじとだに思はじやなぞ (未詳) 〔釈前〕〔釈宮〕いはじといふもこれもいふなり、〔奥〕、〔紫〕〔異〕〔二〕〔休〕思はじやさは、〔河〕、〔弄〕

〔初ノミ〕、〔細〕〔紹〕〔孟〕②、〔孟〕④いはじといふもいふ

はいふなり、〔屋〕つらきうき世にすみかねにけり、〔岷〕

思はじやきみ、〔湖〕〔引〕〔拾〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②思はじと思ふものから夏の雨のふりすてがたき君にもあるかな（古今六帖第一、雨、三三三）〔拾〕〔余〕

18 九月にはやがての宮にうつろひ給べければふたゝびの御はらへのいそぎとりかさねてあるべきに（元禄6・332）

長月の有明の月のありつゝも君しきまさばわれ恋めやも

〔拾遺集卷三、恋三、五五、題しらず 人麿・柿本集、三三三・小町集、一六五、〕「君しもまさば待ちこそはせめ」・古今六帖第一、有明、人麿、三三四、〕「我も忘れじ」〔孟〕

19 物おもふ人のたましひはげにあくがるゝ物になむありけると（元禄4・334）

①物思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる玉かとぞみる（後拾遺集卷三、神祇、二六四、男に忘れられて侍りける頃貴

ぶねにまゐりてみたらし川に螢のとび侍りけるを見て詠める 和泉式部）〔花〕〔一〕あくがれにける、〔紹〕〔五五〕〔岷〕

〔湖〕〔引〕

②奥山にたぎりて落つる滝つ瀬の玉ちるばかり物な思ひそ

（後拾遺集卷三、神祇雑六、二五五、御かへし）〔岷〕

③我が恋にたぐへてやりし魂の返りごと待つ程の久しき（兼盛集、二五三、）返事もさらにせねば）〔拾〕〔余〕

④なくなればなげのあはれもいはるゝをさは心みにあくがれぬ魂（小大君集、二六四、かへし）〔拾〕〔余〕

⑤思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えばたま結び

せよ（伊勢物語、二四）〔事〕〔集〕

20 なげきわび空にみだるゝわがたまをむすびとどめよしたがへのつま（元禄6・334）

①思ひ余り出でにし魂のあるならむ夜深く見えば魂結びせよ（伊勢物語、二四）〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔湖〕〔余〕歎きわび、〔岷〕〔引〕

②魂は見つぬしは誰とも知らねども結びとどめよしたがひのつま（袋草子、吉備公誦文歌）〔河〕むすびとどめつ、

〔休〕〔紹〕、〔孟〕〔湖〕したがへのつま、〔岷〕、〔引〕むすびぞとむるしたがへのつま、〔余〕〔事〕

21 たいらかにもはたとうちおぼしけり（同10・335）

時鳥はつ声きけばあぢきなくぬし定まらぬ恋せらるはた（古今集卷三、夏、一四、郭公の始めて鳴きけるを聞きてよめる 素性）〔細〕〔岷〕〔湖〕〔余〕なく声きけば

22 いふせさにけふなむうひだちし侍を（同13・337）

①夏ばかり初立する郭公巢にはかへらぬ年もあらじな（うつほ物語、祭の使）〔拾〕〔新〕〔余〕

②はとときするたつ山を里としらば木のまを行きて聞くべきものを（曾丹集、三三六、源順）〔拾〕〔余〕

③山里の人のみなかけけふみれば薄く霞の峯にうひたつ（未詳）〔拾〕〔余〕

23 あしをそらにてたれもくまかで給ぬれば（同7・339）

①立ちて居るたどきも知らにわが心天つ空なり土は踏めども（万葉集卷三、二六七）〔拾〕立居するたどきもしらず

② 吾妹子が夜戸出のすがた見てしより心空なり地は踏めども

(万葉集卷十二、二五三) (拾)

③ 徘徊り往實の里に妹を置きて心空なり土は踏めども (万葉集卷十一、二三四) (拾) 立ちとまり

④ 下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ (万葉集卷十四、二四三) (拾)

24 えきこえつかすゆすりみちていみじき御心まどひも (三三12・339)

① 大海の磯もとゆすり立つ波の寄らむと思へる浜の清けく

(万葉集卷十、二三九) (拾)、(新) (上古、ミ)

② 御足跡作る 石の響きは 天に到り 地さへ揺すれ 父母がために 諸人のために (仏足石歌、二) (拾) (新)

③ 朝もよひ紀の川ゆすり行く水のいづさやむさやいるさやむさや (今昔物語、一七四) (拾)

25 御まくらなどもさながら二三日みたてまつり給へど (三三13・339)

しかばかり契りしものを渡り川帰る程には忘るべしやは (後拾遺集卷十、哀傷、五六、秋身まかりける人を思ひいでよめる 源重之) (岷)

26 うれしきせもまじりておとゞは御涙のいとまなし (三四4・339)

① 嬉しきもうきも心はひとつにて別れぬものは涙なりけり (後撰集卷六、雑二、二八六、物思ひ侍りける頃やんごとなき

高き所よりとはせ給へりければ 読人しらす) (湖) (余)

(事)

② こゝろみに猶おりたゝむ涙川うれしきせにも流れあふやと

(後撰集卷十、恋三、六三、又 敏仲) (余)

27 おとゞのやみにくれまどひ給へるさまをみたまふもことはりに (三五2・340)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

(後撰集卷十、雑二、二三、太政大臣の左大將にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞ

めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第二、三三三、

「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一六六、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言) (事) (集)

28 いみじければ空のみながめられ給て (三五3・340)

大空は恋しき人の形見かはもの思ふごとに眺めらるらむ

(古今集卷十、恋四、七三、題しらず さかゐのひとさね・古今六帖第二、天の原、三三三、さかゐのひとさね) (事) (集)

29 わか君をみたてまつり給にもなにゝしのぶのといとゞ露けゝれど (三五14・341)

結び置きし形見の子だになかりせば何にしのぶの草をつままし (後撰集卷六、雑三、二八六、兼忠朝臣の母みまかりに

ければ兼忠をば故枇杷左大臣の家にむすめをばきさいの宮にさぶらはせむとあひ定めて二人ながらまつ枇杷の家に渡

し送るとくはへ侍りける 兼忠朝臣の母のめのと・古今
六帖第三、かたみ、三三九五「(釈前) (釈邑) (紫) (異) (河)
「(一) (細) (休) (絶) (孟) (湖) 結び置く、(釈書) むすびを
く、露をかけまし、(奥)、(弄) (初句ノミ)、「結び置く」、
「孟」の逢ふ事の、(屋)とぞめをく、(岷)残しおくかたみ
の子さへ、(引) (余) (全) (対) (事) (大) (評) (集)

30 宮はしづみいりてそのまゝにおきあがり給はず (三〇六・一・

341)

④ 珠衣のさるさるしづみ家の妹にもの言はず来て思ひかねつ
も (万葉集卷四、三三三、柿本朝臣人麿) (拾) (余)

② 古りにし姫にしてやかくばかり恋に沈まむ手児の如 (万葉
集卷二、二三、大津皇子の宮の侍、石川女郎、大伴宿禰宿奈
麿に贈る歌・古今六帖第三、おむな、三三六、「古のおむな
にしてや」 (拾) (余) いにしへの、(新) (第三四五句ノミ)

31 袖のうへの玉のくだけたりけむよりもあさましげなり (三〇六・

5・341)

世の人の 貴み願ふ 七種の 宝も我は 何せむに わが
間の 生れ出でたる 白玉の わが子古日は 明星の 明
くる朝は きたたへの 床の辺去らず 立てれども をれ
ども ともに戯れ 夕星の 夕になれば いざ寝よと 手
を携はり 父母も うへは勿さかり 三枝の 中にを寝む
と 愛しく しが語らへば いつしかも 人と成り出でて
悪しけくも 善けくも見むと 大船の 思ひたのむに 思
はぬに 横しま風の にふふかに 覆ひ来れば せむ術の

たどきを知らに しろたへの たすきを掛け まそ鏡 手

に取り持ちて 天つ神 仰ぎ乞ひ祈み 地つ祇 伏して額

つき かからずも かかりも 神のまにまにと 立ちあざ

り 我乞ひ祈めど しましくも 快けくは無しに ややや

やに 容つくほり 朝な朝な 言ふこと止み たまきはる

命絶えぬれ 立ちをどり 足すりさげ 伏し仰ぎ 胸打

ち嘆き 手に持てる 吾が児飛ばしつ 世間の道 (万葉集

卷三、六四、男子名は古日に恋ふる歌) (拾) (余) 世の人の

たふとびねがふ七くさのたからも我は何せんわが中のう

まれ出たる白玉のわがこふる日は○玉きはる命たえぬれ

立をとりあしずりさげびふしあふぎむねうちなげき手に

もてるあがことばしつよのなかのみち、(新)うまれ出た

る白玉のわが子古日は○手にもたるあが子とはしつよの

中の道

32 うしとおもひしみにし世もなべていとはしうなり給て (三〇六・

10・342)

大方のわが身一つの憂きからにすべての世をも恨みつるか

な (後撰集卷七、雑三、二三三、題しらず 読人しらず・拾

遺集卷五、恋三、六三三、題しらず 貫之) (紫) (異) おほか

たは

33 かゝるほだしだにそはざましかはねがはしきさまにもなり

なましと (三〇六・10・342)

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり

けれ (古今集卷六、雑下、六三三、おなじ文字なき歌 物部

よしな)〔紫〕〔異〕〔拾〕〔余〕〔事〕

34 とのゐる人々はちかうめぐりてさぶらへどかたはらさびしく
て(三〇三・342)

独りねにありし昔のおもほえて猶なき床を求めつるかな

(玉葉集卷十、雜四、三三四、女御瀧子女王かくれて後よませ
給うける 朱雀院御製)〔拾〕〔余〕

35 時しもあれとねざめがちなるにこゑすぐれたるかぎり(三六
14・342)

①時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきもの

を(古今集卷六、哀傷、八五、紀友則が身まかりにける時

よめる 忠岑・忠岑集、一九三、友則がなくなりし後・古

今六帖第四、かなしび、三三三、「時しまれ秋やは人にさ

るは夜寒むになれる頃しも)〔秋前〕秋やは人にさよるは

よさむになれるころしも、〔秋宮〕秋やは人にいとよ

さむになれるころしも、〔奥〕さるは夜さむに、〔紫〕〔異〕

〔孟〕〔余〕⑦さるは夜寒になれるころしも、〔河〕秋やは

人にさるは夜さむに、〔弄〕〔細〕第三句ノミ、〔一〕〔休〕

秋やは人にさるは夜寒になれる頃しも、〔紹〕秋やは人

に、〔孟〕〔屋〕、〔岷〕あるをみしだに、〔湖〕〔引〕〔余〕④

〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②時しもあれ秋しも人の別るればいと袂ぞ露けかりける

(拾遺集卷六、別、三六、題しらず よみ人しらず)〔余〕

36 ふかき秋のあはれまさり行風のをと身にしみけるかなとなら
はぬ御ひとりねに(三〇一・342)

①吹き来れば身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな

(古今六帖第一、秋の風、三三三、友則・統古今集卷四、秋
上、三六、秋の歌の中に 紀友則、「吹きよれば)〔河〕

〔湖〕〔引〕〔余〕吹きよれば、〔弄〕〔上句ノミ〕「吹きよれば」、

〔一〕、八細V引歌に及べからず、〔休〕吹きよればさ色

なきものに、〔紹〕〔孟〕〔岷〕

②身に寒く秋のさよ風吹くからにふりにし人の夢に見えつる

(曾丹集、三三六)〔弄〕〔一〕〔孟〕第二句ノミ、〔紹〕夢にみ

えつゝ不及引歌、〔岷〕、〔湖〕夢にみえつゝ、

③うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み偲ひつるかも

(万葉集卷三、四三、月移りて後、秋風を悲しび嘆きて家持

の作る歌)〔拾〕〔新〕〔余〕

④しのめの空霧わたりいつしかに秋の景色に世はなりにけ

り(紫式部集、三六六、七月ついたち頃曙なりけり、かへ

し・玉葉集卷四、秋上、四六、七月一日あけほの空をみて

よめる 紫式部、「いつしかと)〔拾〕〔新〕朝ぼらけ霧た

ちわたり、〔余〕

⑤秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかり哀なるらむ

(和泉式部集、風、四三六)〔事〕

37 あさばらけのきりわたれるに菊のけしきはめる枝に(三〇二・
342)

東路の草葉をわけむひとよりも後るゝ袖ぞまづは露けき

(拾遺集卷六、別、三三、同じ御乳母のせんに殿上のをのこ

ども女房など別をしみ侍りけるに 御乳母少納言)〔河〕

〔孟〕

38 はて／＼はあはれなる世をいひ／＼てうちなきなどもし給けり
 〔三〇九・345〕

世の中をかくいひ／＼のはて／＼はいかにやいかにならむとすらむ〔拾遺集卷六、雑上、五五、題しらず、よみ人しらず・同卷下、哀傷、三四〕〔紹〕、〔引〕かくいひ／＼て、
 〔拾〕〔新〕〔余〕

39 雨となり雲とや成にけんいまはしらずとうちひとりごちて
 〔三〇九・345〕

① 限りなき思ひの空にみちぬればいくその煙り雲となるらむ
 〔拾遺集卷五、恋五、三三、田融院の御時少将の更衣のもとに遣はしける 藤原有時〕〔孟〕思ひは空に

② 墨染めの衣の袖はくもなれや涙の雨のたえず降るらむ〔拾遺集卷三、哀傷、三三、題しらず、読人しらず〕〔孟〕
 40 うちひとりごちてつらづゑつき給へる御さま〔三〇九・345〕

① こと繁き心よりさく物思ひの花の枝をやつら杖につく〔貫之集、二〇三、古今六帖第四、雑の思、三〇四、貫之〕〔孟〕
 ② 歎きこる山とし高く成りぬればつら杖のみぞまつつかれける〔古今集卷六、誹諧、二五、題しらず、大輔〕〔孟〕〔引〕

41 かれたる下草の中にりんだうなでしこなどのさきいでたるを
 〔三二一・346〕

冬なれど君がかきほにさきぬればうべ床夏に恋しかりけり
 〔後撰集卷五、恋六、二五、源正明朝臣十月ばかりに床夏を

折りて送り侍りければ 読人しらず〕〔河〕君が垣ねに咲

きければむべとこ夏に、〔孟〕咲きければむべとこ夏に、
 〔岷〕君が垣ねに咲きければ、〔湖〕〔余〕咲きければ

42 にはひおとりてや御らんせらるらむときこえ給へり〔三二三・346〕

とゞめ置きて誰をあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけり〔後拾遺集卷下、哀傷、五六、小式部内侍なくなりてうまごどもの侍りけるを見てよみ侍りける 和泉式部・和泉式部集、四六、七〕〔岷〕〔湖〕

43 いまもみてなか／＼袖をくたすかなかきはあれにしまとなどしこ〔三二七・347〕

あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなどしこ〔古今集卷十四、恋四、六五、題しらず、読人しらず・古今六帖第六、なでしこ、三〇四、和泉式部日記、五〇、〕〔垣穂に生ふる〕〔湖〕〔玉〕第二句ノミ、〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

44 わきてこのくれこそ袖は露けゝれ物おもふ秋はあまたへぬれど〔三二二・347〕

つねよりも物思ふ人のまさるかなうべもいひけり秋の夕暮
 〔元真集、三〇三、新拾遺集卷六、雑上、二〇二、題しらず 藤原元真、〕〔物思ふことの〕〔余〕物思ふことの

45 いつも時雨はとあり〔三二二・347〕

神無月いつも時雨はふりしかとかく袖ひづる折はなかりき
 〔未詳〕〔釈前〕、〔釈宮〕〔釈書〕かく袖ぬらす、〔奥〕〔紫〕

〔異〕△弄△〔河〕△〔細〕△〔休〕△〔紹〕△〔孟〕△〔屋〕△〔岷〕△〔湖〕△〔引〕
〔拾〕△〔余〕△〔全〕△〔対〕△〔事〕△〔大〕△〔評〕△〔集〕

46 大うち山をおもひやりきこえながら(三二・347)

白雲の九重にしも立ちつるは大内山といへばなりけり(兼
輔集、二六三、亭子院の帝の大内山におはしますにうちの
御使に参りて・新勅撰集卷六、雜四、三六三、亭子院大内山
におはしましける時勅使にて参りて侍りけるに麓より雲の
立ちのほりけるをみてよみ侍りける 中納言兼輔、「九重
にたつ峯なれば大内山といふにぞありける」〔釈前〕こゝ
のへに立つ峯なれば…人もいひけり、〔釈宮〕△〔奥〕△〔紫〕
△〔異〕△〔河〕△〔一〕△〔細〕△〔岷〕△〔湖〕△〔余〕△九重に立つ峯なれば…む
べもいひけり、〔弄〕△〔下句ノミ〕、「九重にたつ山なれば」、
〔紹〕△〔屋〕△九重に立つ嶺なれば…いふにぞありける、〔評〕
△〔集〕

47 秋ぎりにたちをくれぬときゝしより時雨ゝ空もいかゞとぞお
もふ(三三・347)

色ならば移るばかりもそめてまし思ふ心をえやはみせける
(後撰集卷十、恋三、三三、いひかはしける女の許よりなほざ
りにいふにこそあめれといへりければ 貫之・貫之集、
二六三、「知る人ぞなき」・古今六帖第五、人知れぬ、三五五、
貫之、「知る人のなき」△〔奥〕△〔異〕△〔孟〕△のしる人のなき(第
五句)、△〔河〕△△〔弄〕△(第二句ノミ)、△〔一〕△△〔細〕△思ふ心は、
△〔休〕△△〔紹〕△△〔孟〕△△〔屋〕△△〔岷〕△△〔湖〕△△〔引〕△△〔対〕

48 つらき人しもこそあはれにおぼえ給人の御心ざまなる(三三

4・347)

① 嬉しくは忘るゝ事もありなましつらきぞ長き形見なりける
(古今六帖第四、雑の思、三〇四、深養父・新古今集卷五、
恋五、一四三、題しらず 深養父) △〔孟〕△うれしさは(引歌ま
でもなし)、△〔引〕△〔余〕△△〔岷〕△(引歌までもなし)

② 天の戸をおし明け方の月みればうき人しもぞ恋しかりける
(新古今集卷四、恋四、三六、題しらず 読人しらず)

△〔玉〕△〔余〕△〔対〕

49 かうこの日ごろありしよりけにたれもゝまぎるゝかたなく
△〔三三〕△348

忘るらむと思ふ心の疑ひにありしよにけにものぞ悲しき
(伊勢物語、五・新古今集卷五、恋五、三六、題しらず 読
人しらず) △〔余〕

50 みなれゝてえしもつねにかゝらずは恋しからじや(三三・14・
348)

① みなれ木のみなれそなれてはなれなば恋しからむや恋しか
らじや(未詳) △〔釈前〕△〔釈宮〕△〔紫〕△〔異〕△〔河〕△△〔初句ノミ〕△
△〔一〕△△〔細〕△△〔紹〕△△〔孟〕△△〔屋〕△△〔岷〕△△〔湖〕△△〔引〕△△〔余〕△△〔全〕△△〔対〕
△△〔評〕△△〔集〕

② 三吉野の象山蔭に立てる松いく秋風にそなれきぬらむ(曾
丹集、三四〇・詞花集卷三、秋、二六、題しらず 曾禰好忠)

△〔拾〕△〔余〕

51 命こそはかなけれとて火をうちながめたまへるまみの(三三
5・349)

①命だに心にかなふものならば何か別れの悲しからまし(古今集卷六、離別、三六、源のさねがつくしへ湯あみむとて罷りける時に山崎にて別れ惜みける所にてよめる しろめ・

古今六帖第四、別、三〇七、「悲しかるべき」・大和物語、六

五、和漢朗詠集卷下、錢別、六四〇(「紹」)、「孟」(下句ノミ、

「岷」(湖)「引」(余)

②恋しきに命をかふる物ならば死には安くぞあるべかりける

(古今集卷十一、恋二、五七、題しらず 読人しらず) (「孟」

(下句ノミ)

52 をくれさきだつほどのさだめなさは世のさがとみ給へしりながら(三二五・351)

末の露もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ(古今六帖第一、雫、三四五・遍昭集、二八七六、世のはかなさいと思ひしられて侍りしかば・和漢朗詠集卷下、無常、

五九、良僧正)「釈前」(「釈宮」)、「奥」(上句ノミ)、「紫」(異)

「河」(紹)「孟」(屋)「岷」(余)「全」(対)「事」(大)「評」(集)

53 なき玉ぞいとかなしきねしとこのあくがれがたき心ならひに(三二一・353)

声をだにきかで別るゝ魂よりもなき床にねむ君ぞ悲しき

(古今集卷十六、哀傷、六六、をこの人の国にまかりけるま

に女にはかに病をしていとよわくなりける時よみ置きて

身まかりけるに 読人しらず・古今六帖第四、かなしび、

三三四)「花」(二)、「細」(第四句ノミ)、「紹」(孟)「岷」(拾

(第四句ノミ)、「此義叶不歟」)、「新」(余)

54 君なくてちりつもりぬるとこなつの露うちはらひいく夜ねぬらむ(三二五・353)

ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわがぬる床夏の

花(古今集卷三、夏、二七、隣よりとこ夏の花をこひにおこ

せたりければをしみてこの歌をよみて遣はしける 躬恒・

古今六帖第六、なでして、三四二、「植ゑしより」・和漢朗詠

集卷上、秋、前栽、三九六、「うゑしより」(拾「余」(下句ノ

ミ)、「全」(事)「大」(集)

55 思つきせぬ事どもをほどふるにつけてもいかにと御せうそこきこえ給へり(三二五・354)

雁のくる嶺の朝きりはれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

(古今集卷十六、雄下、九五、題しらず 読人しらず・古今六

帖第一、霧、三三二)「紫」(異)「河」(孟)「屋」(岷)「余」

「一」(引歌までもなし)

56 あやなくもへだてけるかなよをかさねさすがになれしよるの衣を(三二一・357)

若草の新手枕を巻き初めて夜をや隔てむにくからなくに

(古今六帖第五、一夜隔てたる、三三三・万葉集卷十一、三三四、

「にくくあらなくに」)「孟」にくからぬ君

57 みつがひとつがにてもあらむかしとの給に(三二六・359)

三日の夜の餅ひはくはじ煩はし聞けば淀野にはゝ子つむな

り(後拾遺集卷三、誹諧、三三三、三条太政大臣の許に侍り

ける人の娘を忍びて語らひ侍りけり女の親腹だちて娘をい

と浅ましく罪しけるなどいひ侍りけるに三月三日かの北の

方三夜のもちひくへとて出しけるによめる 藤原実方朝臣・実方朝臣集、三七三、小一条にある人のむすめを忍びて語らふに女親きゝつけていみじう腹だちてつみなどするときく頃三日の夕がた北の方もちひまるれとあれば、「憂かりけり(第三句)はゝ摘みけり」(河)〔五〕〔拾〕

58 とし比あはれとおもひきこえつるはかたはしにもあらざりけり(三三九・359)

逢ひみての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

(拾遺集卷三、恋三、セ〇、題しらず 権中納言敦忠・古今六帖第五、あした、三三四、敦忠) (岷)

59 しづ心なくおもかけに恋しければあやしの心やと(三三三・360)

目をさめてひまより月を眺むれば面影にのみ君は見えつる

(古今六帖第四、おもかけ、三三三) (拾)〔余〕

60 新手枕の心ぐるしくてよをやへだてむとおぼしわすらはるれば(三三三・361)

わか草の新手枕をまきそめて夜をやへだてむにくからなく

に(古今六帖第五、一夜隔てたる、三三五、万葉集卷十一、三三三、「憎くあらなくに」) (奥)〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕(第二句ノミ、(一)まきこめて、(休)〔紹〕〔孟〕〔尾〕〔岷〕〔湖〕、

〔引〕人にくゝあらなくに、〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕

〔評〕〔集〕

61 宮づかへもおさしくだにしなし給へらば(三四四・361)

くれたけの よゝのふること なかりせば 伊香保の沼の

いかにして 思ふこゝろを のばへまし あはれ昔べ ありきてふ 人鷹こそは うれしけれ 身は下ながら ことの葉を 天つそらまで きこえあげ 末の世までの あとゝなし 今もおほせの くだれるは 塵につげとや ちりの身に つもれることを とはるらむ これを思へば いにしへも 葉けがせる けだものゝ 雲にほえけむ こゝちして ちゞの情も おもほえず 一つこゝろぞ ほこらしき かくはあれ共 てるひかり 近きまもりの 身なりしを たれかは秋の くるかたに 欺き出でゝ みかきより 殿上もる身の みかきもり をさゝしくも おもほえず こゝの重ねの なかにては あらしの風も きかざりき 今はやまし ちかければ 春はかすみに たなびかれ なつはうつ蟬 なきくらし 秋はしぐれに そでをかき ふゆは霜にぞ せめらるゝ かゝる佗しき 身ながらに つもれる年を しるせれば 五つの六つに なりにけり 是にそはれる わたくしの 老のかずさへ やよければ 身は賤しくて としたかき ことの苦しさ かくしつゝ ながらの橋の ながらへて なにはの浦に たつなみの 波のしわにや おぼゝれむ さすがに命 をしければ こしの国なる しらやまの かしらは白く なりぬとも おとはの滝の おとにきく 老ず死なずの くすりも が 君が八千代を わかえつゝ見む (古今集卷六、雑体、二〇三、ふる歌にくはへたてまつれる長歌 壬生忠岑)

〔河〕〔岷〕とのへもる身のみかきもりおさしくもおも

ほへず(二部ノミ)

62 なれはまさらぬ御けしきの心うきことうらみきこえ給(三三
5・362)

み狩するかり場の小野の檣しばの馴れはまさらで恋ぞまさ

れる(万葉集卷三、三〇四、「馴れはまさらず恋こそまされ」)

〔釈前〕、「釈宮」ならしはや、〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕

△弄▽(二)〔細〕、「休」はし鷹の、〔紹〕〔拾〕交野の御野

の、〔孟〕⑦・〔孟〕④うとくなり行く(第五句、〔岷〕〔湖〕

〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

63 春やきぬるとともまつ御むぜられになんまいり侍つれと(三三
7・364)

①新らしくあくる今年を百年の春のはじめと驚ぞ鳴く(貫之

集、一七四三、延喜の御時内裏の御屏風の歌廿六首、元日驚

なく所・古今六帖第一、ついたちの日、三〇九四、「明くる今

宵を」・風雅集卷三、賀、三三九、延喜の御時、御屏風の歌

貫之、「あくる年をば」)〔釈前〕(二)〔湖〕春やきぬると、

〔釈宮〕あくることもも…はるやきぬるとうぐひすのな

く、〔釈書〕あくるとしをも…春やきぬると、〔奥〕〔紫〕

〔異〕春やきぬると驚のなく、〔河〕〔休〕〔岷〕あへることし

を…春やきぬると、〔弄〕〔初句ノミ〕、「あたらしき」、〔孟〕

春やきぬると驚のなく(引歌相当ともなし如何)、〔拾〕

〔余〕あくることしは…春やきぬると、〔余〕、〔紹〕〔引歌

不当)

②ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりと驚かれぬる

(後撰集卷二、春上、一、元日に二条のきさいの宮にて白き
大桂を給はりて 藤原敏行朝臣・敏行集、一三三六、正月一
日二条中宮にして白きおはんうちき給はりて)〔拾〕〔余〕
ふる雪に

64 あたらしきとしともいはずふる物はふりぬる人の涙なりけり

(三三12・364)

①新しき年とはいへどしかすがに我が身ふりぬる今日にぞあ

りける(貫之集、一三三四、延喜十四年十二月女四宮の御屏風

の料の歌亭子院の仰せによりて奉る)〔河〕〔岷〕〔拾〕〔余〕

〔事〕

②なく涙ふりにし年の衣手は新らしくにもかはらざりけり

(後撰集卷三、哀傷、一三六、かへし 兼輔朝臣・兼輔集、

一三三七、返し、「改まれども…返さざりけり」)〔拾〕〔余〕

賢木

1 斎宮の御くだりちかう成ゆくまゝに御息所ものゝころぼそくおもほすやむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし(三三・一・367)

①世にふればまたも越えけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらむ(拾遺集卷六、雑上、四三、円融院の御時斎宮下り侍りけるに母の前の斎宮もろともに越え侍りて 斎宮女御・敏行集、六四三)〔紫〕〔河〕、〔孟〕世にすめば、〔湖〕

②大淀の浦立つ波の返らずは変らぬ松の色を見ましや(斎宮集、六五三、伊勢に大淀の浦といふ所に松いと多かりける御祓へに・新古今集卷古、雑中、一六四)〔紫〕〔河〕〔孟〕

2 おやそひくたり給れいもことになれどいとみはなちがたき御ありさまなるにつけて(三三・五・367)

①世にふれば又も越えけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらん(拾遺集卷六、雑上、四三、円融院の御時斎宮下り侍りけるに母の前の斎宮もろともに越え侍りて 斎宮女御・敏行集、六四三)〔紫〕〔河〕〔孟〕

②大よどの浦に立つ浪かへらずは松の変らぬ色を見ましや(新古今集卷古、雑中、一六四、むすめの斎宮に具して下り侍りて大淀の浦にみそぎし侍るとて 女御・敏子・女王・斎宮集、一五三)〔紫〕〔河〕〔孟〕

3 いとみはなちがたき御ありさまにことにつけてうき世を行はな

れむとおぼすに(三三・六・367)

①新玉の年ふり積もる山里にゆき離れぬる我が身なりけり(躬恒集、一五三)〔拾〕〔余〕

②人心うさこそまされ春たてば止まらず消ゆるゆき隠れなむ(後撰集卷一、春上、三、年を経て心かけたる女の今年ばかりをだに待ちくらすといひけるが又の年もつれなかりければ 読人しらず)〔拾〕

③いつかたにゆきかくれなむ世の中に身のあればこそ人もつられけ(拾遺集卷五、恋五、四三、題しらず よみ人しらず・古今六帖第四、恨みず、三五三)〔拾〕〔余〕

④世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし(古今集卷六、雑下、四四、題しらず 読人しらず)〔新〕

4 いでやとはおぼしわづらひながら(三四・四・368)

①我をのみ思ふといはどあるべきをいでや心は大幣にして(古今集卷六、雑体、誹諧、二四、題しらず 読人しらず・古今六帖第四、雑の思、三九六)〔河〕、〔孟〕(上句ノミ、二)あるべきに、〔休〕、〔孟〕有るべきに(引歌ニ不及、〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔集〕、八細引歌に及べからざる歟)

②わびぬれば今はとものを思へども心にぬは涙なりけり(大和物語、四六・大鏡卷一、八〇、醍醐皇后大輔、「今はたもこそを」)〔屋〕

5 松風すこく吹あはせてそのことゝもきゝわかれぬほどにもの

ゝねどもたえどきこえたるいとえんなり (三三〇・368)

琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ (拾遺集卷六、雑上、望、野宮に斎宮の庚申し侍りけるに松風入る夜琴といふ題をよみ侍りける 斎宮女御・古今六帖第三、こと、三三〇・和漢朗詠集卷下、管絃、哭六、「かよふなり」) (弄) (二) (細) (上句ノミ、) (紹) (唄) (湖) (余)

〔事〕〔集〕

6 おもはししうばかうしめのほかにはもてなし給はでいふせう侍事をも (三三〇・369)

誰ならむいはでの森にこととはむしめの外にて我が名借りけむ (実方朝臣集、三三〇、ある女のもとにさねかたの兵衛の佐となのりてこと人のいきたりけるを女に) (拾)

〔余〕

7 さか木をいさゝかおりても給へりけるをさしいれてかはらぬ色をしるべにてこそ (三三〇・370)

① ちはやぶる神がき山のさかき葉は時雨に色も変らざりけり (後撰集卷六、冬、望六、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、山、三三六、「まささらざりけり」) (結句) (花) (休) (孟) (唄) (湖) (余) (事) (集)

② ときはなる松にし心なれきなばかはらぬ色も今はたのまん (未詳) (花) (孟) (屋) (唄)

③ おく霜に色も変らぬ榊葉の薫るや人のとめてきつらむ (貫之集、三三〇、十一月神楽・新古今集卷六、神祇、一六六、榊葉をよみ侍りける 紀貫之、「香をやは人の」) (湖) (引)

香をやは人のもとめきつらん

④ 霜八度おけどかれせぬ榊葉のたち栄ゆべき神のきねかも (古今集卷三、大歌所御歌、一〇四、とりものゝ歌・古今六帖第一、神楽、三二〇) (新)

8 かはらぬ色をしるべにてこそいがきもこえ侍にけれ (三三二・370)

① ちはやぶる神の斎垣もこえぬべし今はわが身の惜しけくもなし (拾遺集卷六、恋四、題しらず 柿本人麿・古今六帖第三、社、三三六、「惜しからなくに」・柿本集、一五三・万葉集卷十、三三三、「今はわが名の」) (奥) (紫) (異) (河)、(一) (下句ノミ、) (細) (上句ノミ、) (紹) (孟) (湖) (余) (全) (対) (事) (大) (集)

② ちはやぶる神の斎垣もこえぬべし大官人の見まくほしさに (伊勢物語、一望) (奥) (紫) (異) (河)、(一) (下句ノミ、) (休) (屋) (唄) (湖) (引) (余) (全) (事) (大)

③ ちはやぶる神の斎垣も越る身は草の戸ざしに障る物かは (古今六帖第三、戸、三三七、なりくに) (河) (ゆる身の草) (とさしも) (真本に) なにかさはらん

④ ちはやぶる神がき山の榊葉は時雨に色もかはらざりけり (後撰集卷六、冬、望六、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、山、三三六、「まささらざりけり」) (紹) (湖) (大)

⑤ 神垣の三室の山の榊葉は神のみまへにしけりあひにけり (古今集卷下、大歌所御歌、二〇四、とりものゝ歌) (紹) (神がきはしるしのすぎもなきものをいかにまがへておれるさ

か木ぞ (三六・4・370)

①わが庵は三輪の山もと恋ひしくはとぶらひきませ杉立てる門 (古今集卷六、雑下、九三、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、かど、三三四、三輪の御歌、「わが宿は」・同第六、すき、三二九、「とぶらひきませ」) (河) 恋しくはとぶらひきませ我宿は三輪の山もと杉たてる門、(弄) (第二句ノミ)、(一)、(細) (第四句ノミ)、(休) (紹) (孟) (岷) ②、(岷) ④恋しくはとぶらひきませ我庵の三輪の山もと杉立てる門、(湖) (全) (対) (事) (大) (集)

②三輪の山いかに待ち見む年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば (古今集卷三、恋三、七六、仲平の朝臣あひしりて侍りけるをかれがたになりければ父が大和の守に侍りけるもとへまかるとてよみて遣はしける 伊勢・伊勢集、一八〇、人の子になりぬれば我を今はよも訪はじと思ひてもとありける大和に行きて暫し有らむと思ひて女・古今六帖第三、山、三三四、伊勢 (紹)

10をとめごがあたりとおもへばさか木ばの香をなつかしみとめてこそおれ (三六・6・370)

①柿葉の春さす枝のあまたあればとがむる神もあらじとぞ思ふ (拾遺集卷三、恋二、六六、返し よみ人しらず) (河) (孟) 枝さすかたの

②おく霜に色も変らぬ柿葉の薫るや人のとめてきつらん (貫之集、一七三、十一月神楽・古今集卷六、神祇、一六六、神楽をよみ侍りける 貫之、「香をやは人の」) (河) かをや

は人のとめてこそらん (貫之きつらん)、(孟) 香をやは人の、(岷)

③さかき葉の香をかぐはしみとめてくれば八十氏人ぞまどるせりける (拾遺集卷六、神楽歌、五七) (河) 八十氏人もまどるせりけり、(弄) 八十氏人もまどひしにけり、(二) 神のみまへにしけりあひにけり (余) (包)、(細) (湖) まどるせりけり、(紹) りるせりけり、(孟) (岷)、(引) かげかぐはしみ、(新) (余) (全) (対) (大) (集)

④少女子が袖ふる山の瑞垣の久しき世よりおもひそめてき (拾遺集卷六、雑恋、三三、題しらず 柿本人丸・古今六帖第三、としへていふ、三三三・万葉集卷四、四二・同卷十一、二四三) (集)

11あかつきのわかればいつも露けきをこは世にしらぬ秋の空かな (三三・7・371)

①曉のなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや (後撰集卷三、恋四、八三、人の許より帰て遣はしける 貫之・拾遺集卷三、恋三、七五、題しらず 貫之・和漢朗詠集卷下、曉、四〇) (花) (休)、(紹) おきてかなしき (孟) (岷) (湖)

②時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを (古今集卷六、哀傷、八三、紀友則が身まかりける時よめる 忠岑・忠岑集、一五六、友則がなくなりし後・古今六帖第四、かなしき、三三四) (新) これもまたかなしきものを

12 わかき人々は身にしめてあやまちもしつべくめできこゆ(三三〇・372)

千早振神のい垣も越えぬべし今はわが身の惜しけくもなし
(拾遺集卷十四、恋四、三〇四、題しらず 柿本人麿・伊勢物語、
一四一・古今六帖第三、社、三九四・柿本集、一三六三・万葉集卷
二、三六三) (新) 大宮人の見まほしさに

13 十六日かつらの河にて御はらへし給つねのぎしきにまさりて
長ぶそうしなどさらぬかむだちめもやむごとなくおぼえある
をえらせ給へり(三六三・373)

万代の始とけふを祈りおきていま行く末は神ぞ知るらむ
(拾遺集卷登、賀、三三三、天曆の御時斎宮くだり侍りける時
の長奉送使にてまかり帰らむとて 中納言朝忠・朝忠集、
一五三三、村上の御時の斎宮に下り給ふに長奉送使にて下り
て帰るとて、「神ぞ数へむ」(紫〔異〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕猶
行く末は

14 かけまくもかしこきおまへにとて(三九二・373)

かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやにかしこき
明日香の 真神の原に ひさかたの 天つ御門を かしこ
くも 定めたまひて 神さぶと 岩隠ります やすみしし
わが大君の きこしめす 背面の国の 真木立つ 不破山
越えて 高麗剣 わぎみが原の 行宮に 天降りいまして
天の下 治めたまひ 食国を 定めたまふと 鶏が鳴く
吾妻の国の 御軍士を 召したまひて ちはやぶる 人を
和せと まつろはぬ 国を治めと 皇子ながら 任けたま

へば 大御身に 大刀取り常かし 大御手に 弓取り持た
し 御軍士を 率ひたまひ ととのふる 鼓の音は 雷
の 声と聞くまで 吹き響むる 小角の音も 敵見たる
虎かはゆると 諸人の おびゆるまでに ささげたる 幡
の なびきは 冬ごもり 春さり来れば 野ごとに 著きて
ある火の 風のむた なびくがごとく 取り持てる 弓は
ずの騒み 雪降る 冬の林に つむじかも い巻き渡ると
思ふまで 聞の恐く 引き放つ 矢の繁けく 大雪の 乱
れて来たる まつろはず 立ち向ひしも 露霜の 消な
ば 消ぬべく 行く鳥の 争ふ間に 渡会の 斎宮ゆ 神
風に い吹きまどはし 天雲を 日の目も見せず とこや
みに 覆ひたまひて 定めてし 瑞穂の国を 神ながら
太しきまして やすみしし わが大王の 天の下 申し給
へば 万代に しかしもあらむと ゆふ花の 栄ゆる時に
わが大王 皇子の御門を 神宮に 装ひまつりて 使はし
し 御門の人も 白たへの 麻ごろも著 壇安の 御門の
原に あかねさす 日のことごと 鹿じもの い葡ひ伏し
つつ ぬばたまの タベにいたれば 大殿を ふり放け見
つつ うづらなす い葡ひもとほり 侍へど さもらひ得
ねば 春鳥の さまよひぬれば 歎も いまだ過ぎぬに 憶
も いまだ尽きねば 言さへく 百済の原ゆ 神葬り 葬
りいまして あさ装よし 城上の宮を 常宮と 高くしま
つりて 神ながら 鎮まりましぬ しかれども わが大王
の 万代と 思ほしめして 作らしし 香具山の宮 万代

に過ぎむと思へや 天のごと ぶり放け見つつ 玉だす
き、かけて思はむ 恐れれども (万葉集卷二、一九、柿本朝
臣人麻呂) (紫) (異) かけまくはかしこけれどもいはまく
もゆゝしけれどもかすが山 (二部ノミ)、(河) (孟) かけま
くもかしこけれどもいはまくもゆかしけれども春日山
(二部ノミ)

15 ゆふにつけてなる神だにこそ (三九三・373)

① 天の原ふみとどろかし鳴る神も思ふなかをばさくるものか
は (古今集卷十四、恋四、五二、題しらず 読人しらず・古今
六帖第一、鳴神、三六二) (釈前)、(釈宮) (上句ノミ)、(釈
書) (奥) (紫) (異) (河)、(弄) (第二句ノミ)、(二) (細) (休)
(孟) (屋) (岷) (湖) (引) (新) (余) (全) (対) (事) (大) (評)
(集)

② 柿葉にゆふしでかけてたが世にか神のみ前に祝ひそめけむ
(拾遺集卷十、神楽、吾二) (河) (孟)、(岷) おいそめにけん
大将の君いとおはれにおぼされてさかきにして (四四一・374)

伊勢の海の千尋の浜に拾ふとも今は何てふかひか有るべき
(後撰集卷三、恋三、五二、西四条の前斎宮まだみこにもの
したまひし時心ざしありて思ふ事侍りける間に斎宮に定ま
りたまひにければ其あくるあしたに柿の枝につけてさしお
かせ侍りける 敦忠朝臣・古今六帖第三、今はかひなし、
三九三、あつたゞ、「今はかひなく思はゆる哉」 (河) (岷)
今はかひなく思はゆるかな、(孟) 伊勢の海ちいろの浜に
…今はかひなくおもはゆるかな

17 ふりすてゝけふはゆくともすぐか河やそせの浪に袖はぬれし
や (四四一・374)

① 鈴鹿川 八十瀬の滝を みな人の 賞づるも著く 時にあ
へる 時にあへるかも (催馬楽、鈴鹿川、吾) (河)

② 鈴鹿河八十瀬渡りて誰故か夜越えに越えむ妻もあらなくに
(万葉集卷三、三二五) (河)

18 又の日せきのあなたよりぞ御返しある (四四一・375)

逢坂の関のあなたもまだまねば東のこともしられざりけり
(後拾遺集卷六、雑三、五二、女の許にまかりたりけるにあ
づまことをさし出て侍りければ 大江匡衡朝臣) (河)
△一▽、(孟) 関のあなたに

19 すぐか河やそせのなみにぬれ／＼ずいせまでたれかおもひを
こせむ (四四二・375)

① 鈴鹿川八十瀬渡りて誰ゆゑか夜越えに越えむ妻もあらなく
に (万葉集卷三、三二五) (休) (紹) 誰故に、(孟) よことに
こえむ、(岷)

② 鈴鹿川 八十瀬の滝を みな人の 賞づるも著く 時にあ
へる 時にあへるかも (催馬楽、鈴鹿川、吾) (孟) 時に
ぞあへる時にあへるも、(岷) 時にあへるも、(余) くめる
もしるくや時にあへるかも

20 ゆくかたをながめもやらむこの秋はあふさか山を霧なへだて
そ (四四六・375)

君があたり見つゝを居らむ伊駒山雲な隠しそ雨はふるとも
(伊勢物語、六) (新)

21 ひとやりならずものさびしげにながめくらし給 (三二・7・375)

人遣の道ならなくに大方はいきつしといひていざ帰りなむ
(古今集卷六、離別、三六、山さきより神なびの森まで送り
に人々まかりて帰りてにして別れ惜みけるによめる 源
さね) (河) (孟)

22 まつおぼしたたるゝ事はあれど又さまゝの御ほだしおほかり (三二・10・377)

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり
けれ (古今集卷六、雑下、三六、おなじ文字なき歌 物部
よしな) (花) (休) (孟) (湖) (余) (全) (対) (事) (大
(集)

23 御四十九日までは女御みやす所たちみな院につどひ給へりつるをすぎぬればちりゝにまかで給 (三二・11・378)

① おきつなみ あれのみ増る 宮のうちは 年へてすみし
伊勢の蟹も ふね流したる こゝちして よらむ方なく
かなしきに なみだの色の くれなゐは われらが中の
しぐれにて 秋のもみちと ひとゝは 己がちりゝ
わかれば 頼むかけなく なりてゝ とまる物とは
はなすゝき きみなき庭に むれたちて 空をまねかば
はつがりの なき渡りつゝ よそにこそ見め (古今集卷
六、雑体、短歌、二〇六、伊勢) (河) (湖) (余) おきつな
みあれのみまさる宮のうちは (云々) 秋のもみちと人々
はをのがさまゝわかれば (一部ノミ、(余)

② 秋風の四方の山より己がじゝふくにちりぬる紅葉悲しな
(拾遺集卷七、物名、三三、四十九日 すけみ) (新) (第三四
五句ノミ)

24 さえわたる池のかゞみのさやけきにみなれしかげをみぬぞかなしき (三二・10・378)

① 池はなほむかしながらの鏡にて影見し君がなきぞ悲しき
(大和物語、三三) (河) (休) (紹) (湖) (引) (新) (事)
(集)

② 水の面にしづく花の色さやかにも君がみ影の思はゆる哉
(古今集卷六、哀傷、八四、諒闇の年池のほとりの花を見て
よめる 簀朝臣) (細) (上句ノミ、(休)、(紹) (孟) (湖)
(余) しづく花の色、(岷)

25 としくれていはぬの水もこほりとちみし人かげのあせも行かな (三二・12・378)

今日よりや天の河原はあせなくむ底ひともなく唯渡りなむ
(後撰集卷五、秋上、三三、七夕をよめる 紀友則) (河)
(余) けふよりは、(岷)

26 ふるき宮は返てたび心ちし給にも御さとずみたえたとし月のほどおぼしめぐらさるべし (三二・14・379)

① 古郷は見しごとくもあらず斧のえのくちし所ぞ恋しかりける
(古今集卷六、雑下、三六、つくしに侍りける時に罷り通ひ
つゝ暮うちける人の許に京に帰り詣でて遣しける 紀友
則・古今六帖第三、をのゝえ、三六六、友則・友則集、元皇
三) (紫) (異)

②秋の山紅葉を幣とたむくればすむわれさへぞ旅心地する

(古今集卷三、秋下、三六、小野といふ所にすみ侍りける時
紅葉を見てよめる 貫之) (河)秋山の(初句)

27 ちもくのころなど院の御時をばさらにもいはずとしごろおと
るけぢめなくて…とのゐ物のふくろおさくみえず (三望
2・379)

①故郷の奈良の都の始より馴れにけるとも見ゆる衣かな (朝
忠集、一五三、殿居ものがへて大輔の君の局にもて来た
るがなえたるに結びつく・後撰集卷五、雑二、二四、雅正
がとのゐ物をとりたがへて大輔が許にもてきたりければ
大輔、「見ゆる衣か」 (拾)(新)

②ふりぬとて思ひも捨てじ唐衣よそへてあやな恨みもぞする
(朝忠集、一五三、返し・後撰集卷五、雑二、二五、かへし
雅正) (拾)(新)

③年をへてなれる中をば唐衣うらみてかへす哀なりけり (元
真集、二五三、かたらふ人の殿の物のうらのいたくあれた
りければ) (新)なれるなかとて

28 あさゆふにみたてまつる人だにあかぬ御さまなれば (三六、4・
382) ※あかぬ御さまなれば―にるめにあかぬ御ありさまなれ
は河―みるめあかすおもへる御さまなれば別相―みるめにあ
らすおほゆる人の御ありさまなれば別国

伊勢のあまの朝な夕なにかづてふみるめに人をあく由も
がな (古今集卷十四、恋四、六三、題しらず 読人しらず・古
今六帖第三、みるめ、三三三、「伊勢の海の」 (業)(異)

(河)(三)

29 なげきつゝわがよはかくてすぐせとやむねのあくべき時ぞと
もなく (三六14・382)

①春日野の浅茅が原におくれ居て時ぞとも無しわが恋ふらく
は (万葉集卷三、三九六) (拾) 浅茅が上に、(余)

②わがごとく物や悲しき郭公時ぞともなく夜たぐなくらむ
(古今集卷三、恋二、五八、題しらず 敏行朝臣・敏行集、
一五三、いかなる折にか・古今六帖第六、ほとゝぎす、三三
七、敏行、「夜々になくらむ」 (拾)(余)

30 夜ふかきあかつき月夜のえもいはずきりわたれるに (三六1・
382)

時雨降る曉月夜紐解かず恋ふらむ君と居らましものを (万
葉集卷下、三三六、問答・古今六帖第一、有明、三三六、「曉月
夜紐とかで君をかなしと」 (拾)(余)

31 御いのりをさへせさせてこのこと思やませたてまつらむとお
ぼしいたらぬ事なくのがれ給 (三六13・383)

恋せじと御手洗川にせしめそき神はうけずぞなりにけらし
も (古今集卷二、恋一、五二、題しらず 読人しらず・伊勢
物語、二四、「神はうけずもなりにける哉」 (業)(異)(河)

32 神はうけずもなりにけるかな、(岷)神はうけずも、(集)
世やつきぬらむとてこのかたをみだし給へるかたはらめ
(三三4・385)

あはざりし涙のもろく成り行くは夜やつきぬらん時やきぬ
らん (未詳) (花)(休)(紹、(三三)引) あはざりき (屋、

〔眠〕あかざりし〔私云此歌をひくに及ばざるか〕、〔湖〕〔新〕

33 御はだしにもこそときこえ給へば〔三三・4・387〕

御狩する駒のつまづく青つゝら君こそ我はほだしなりけれ

〔拾遺集卷六、雑恋、三三、題しらず〕よみ人しらず〔弄〕

〔眠〕みくまのゝ〔初句〕、〔休〕〔紹〕み熊野にゝ君こそまろが

34 ながきよのうらみを人にのこしてもかつは心をあたとしらなむ〔三三・6・387〕

心こそ心をはかる心なれ心のあだはこゝろなりけり〔古今六帖第四、雑の思、三三、題しらず〕

〔新〕

35 なぞや世にふればうさこさまされとおぼしたつに〔三三・12・387〕

〔新〕

世にふればうさこさまされみ吉野の岩の陰道ふみならして

む〔古今集卷六、雑下、三三、題しらず〕読人しらず

〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕

〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕

〔大〕〔集〕

36 よろづのことありしにもあらずかはりゆく世にこそあめれ〔三三・6・388〕

天の河浮き木にのれる我なれやありしにもあらず世はなり

にけり〔未詳〕〔拾〕〔余〕

37 秋のゝもみたまひがてら雲林院にまうで給へり〔三三・3・390〕

① いざ桜我も散りなむ一盛りありなば人に憂きめみえなむ

〔古今集卷三、春下、七、雲林院にて桜の花をよめる、そう

く法師・素性法師集、三三、題しらず、古今六帖第六、さくら、三三、四

一、素性〕〔河〕〔孟〕〔眠〕

② わび人のわきて立ちよる木のもととは頼むかげなく紅葉散り

けり〔古今集卷三、秋下、三三、雲林院の木のかげにたゝず

みてよみける、僧正遍昭・遍昭集、二六、四、雲林院の木か

げにたゝずみありきて〕〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔余〕

38 もみちやうゝいろづきわたりて秋の野のいとなまめきたる

など〔三三・6・390〕

秋の野になまめきたる女郎花あなかしがまし花もひと時

〔古今集卷六、雑体、誹諧、三三、題しらず〕僧正遍昭・

古今六帖第六、女郎花、三三、題しらず、遍昭集、二六、四、

ことし〕〔休〕〔紹〕〔眠〕〔湖〕〔余〕〔事〕〔集〕

39 うき人しもぞとおぼしいでらるゝおしあけがたの月影に〔三三・9・390〕

〔新〕

天の戸をおし明け方の月見ればうき人しもぞ恋しかりける

〔新古今集卷六、雑恋、三三、題しらず〕読人しらず

〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕

〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕〔新〕

〔大〕〔集〕

40 あさぢふの露のやどりに君ををきてよもの嵐ぞしづ心なき

〔三三・5・391〕

① 秋風の露の宿りに君をおきて塵を出でぬることぞ悲しき

〔新古今集卷六、哀傷、三六、例ならぬ事重くなりて御ぐし
おろし給ひける日上東門院、中宮と申しける時遣しける
一条院御歌〕〔河〕〔孟〕〔湖〕〔余〕あさちふの、〔引〕

② つゆならぬ心を花におきそめて風ふくごとに物思ひぞつく
〔古今集卷三、恋三、三六、やよひばかりに物のたうびける
人の許に又人まかりてせをそとすと聞きてよみて遣はしける
貫之・古今六帖第一、露、三三三、貫之、「物をこそ思
へ」〕〔岷〕

41 むかしをいまにと思たまふるもかひなく〔三三三・392〕

古のしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな〔伊勢物語、〇〕〔釈前〕〔釈宮〕〔屋〕しづやしづ〔初句〕、〔釈書〕

〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔二〕〔第二句ノミ〕、〔細〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

42 とりかへされむものゝやうにとなれくしげに〔三三三・392〕

① とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ〔未詳〕△弄△〔二〕、〔細〕〔第二句ノミ〕、〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

② 池にすむ我が名ををしのとり返す物にもがなや人を恨みじ〔金葉集卷七、恋上、四六、人をうつらみてつかはしける 藤

原惟規〕〔拾〕〔余〕

③ 取り返すものにもがなや箱鳥のあけて悔しき物をこそ思へ〔古今六帖第一、はこどり、三三三〕〔拾〕〔余〕

④ 大空をとり返すとも聞かなくにはしとも見ゆる秋の菊哉

〔新撰万葉集卷下、秋〇〕〔拾〕〔余〕あめつちを…見えなくに
43 このもかのもにあやしきはふるひどもゝあつまりて〔三三三・393〕

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかけにます蔭はなし〔古今集卷三、東歌、常陸歌、二三三〕〔最〕しくかけはなし、〔事〕〔評〕

44 くらき御車のうちにてふちの御たもとにやつれ給へれば〔三三三・393〕

藤衣はつるゝいとわび人の涙の玉の緒とぞなりける〔古今集卷六、哀傷、八四、父がおもひにてよめる 忠岑・貫之集、二七六、おやのおもひに侍りける時よみける、「君こ

ふる〔第三句〕…緒とぞなりぬる」・古今六帖第四、三三三、忠岑〕〔紫〕〔異〕

45 山づとにもたせ給へりしもみちおまへのに御らんじくらぶれば〔三三三・394〕

あしひきの山行きしかば山人のわれにえしめし山づとぞこれ〔万葉集卷三、四三、古今六帖第三、つと、三三三〕〔拾〕

46 もみちはひとりみ侍ににしくらう思たまふれば〔三三三・394〕

見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり〔古今集卷五、秋下、三三、北山に紅葉折らむとてまかれりける時によめる 貫之・古今六帖第一、紅葉、三三三、貫之、和漢朗詠集卷上、秋、落葉、三三〕〔釈前〕〔釈宮〕、〔釈書〕我

(虫)

【どの(第三句)、「紫」(異)「河」(八弄)「細」(休)「紹」

「孟」(屋)「岷」(湖)「余」(引)「全」(対)「事」(大)「集」

47 なつかしうなごやかにぞおはします(三六1・395)

むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも

(万葉集卷四、三六、京職藤原大夫)「岷」あつぶすまなごや

かにしてきたれども君としねゝばはだへさむしも

48 なにごともはかしくからぬ身づからのおもておこしにな

む(三六1・396)

あが仏顔くらべせよ極楽のおもて起しは我のみぞせむ(仲

文集、二五三、返し)「拾」(余)

49 かすみも人のとかむかしも侍ける事にやなど(三三3・397)

山桜見にゆく道をへだつれば人の心ぞかすみなりける(後

拾遺集卷一、春上、六、人々花見にまかりけるをかくとも

つけ侍らざりければ遣はしける 藤原隆経朝臣)「奥」霞

も人の心なるべし、「紫」(異)「河」(細)「引」(紹)「孟」(屋)

「岷」(湖)「引」(拾)「新」(余)霞も人の心なりけり、「弄」

(第二句ノミ)、「全」(対)「事」(大)「集」

50 木がらしのふくにつけつまちしまにおぼつかなさのころも

へにけり(三三11・398)

秋風の吹くにつけても訪はぬかな萩の葉ならば音はしてま

し(後撰集卷三、恋四、八四、平かねきがやう／＼かれがた

になりにければつかはしける 中務・古今六帖第六、をぎ、

三三六三)「休」

93 賢 木
51 むげにくづをれにけれ身のみものうきほどに(三四2・398)

数ならぬ身のみものうきおもほえて待たるゝまでもなりに

けるかな(後撰集卷六、雑四、三六、かへしむこ)「釈

前」おぼゝえてゝまたるゝまでに、「釈宮」奥「紫」(異)

「河」、「弄」(初句ノミ)、「二」(細)「休」「紹」「孟」(屋)「岷」

「湖」(引)「全」(対)「事」(大)「集」

52 あひみずしてしのぶころのなみだをもなべてのそらのしぐ

れとやみる(三四3・398)

①人恋ふる心は秋にかよへばや空も袂もともにしぐるる(古

今六帖第一、時雨、三三六、貫之集、二七〇、「君こふる涙は

秋に」(第二句)「花」(引)「紹」「孟」(屋)心は空にゝ雨も

涙も、「弄」心は空にゝ雨も涙も空にこぼるゝ、「岷」(湖)、

「引」心の空にゝ雨も涙も、「事」、八細V(引歌に及ばざ

る歎)

②君を惜しむ心の空に通へばや今日止るべき雨の降るらむ

(貫之集、二五四、相しれりける人の物へ行くに馬の銭しけ

るあひだに雨の降りければえいかずなりにけるに詠める・

玉葉集卷六、旅、二二六、相知れりける人の物へ罷りけるに

馬の銭しける間雨降りてとゞまり侍りにければつらゆき

「花」(孟)「湖」(余)君おしむ、「岷」(拾)「上句ノミ」、八細V

(引歌に及ばざる歎)

53 たきゞこるほどよりうちはじめおなじういふ事のはも(三五

7・400)

法華経を我がえしことは薪こり葉つみ水汲み仕へてぞ得し

(拾遺集卷三、哀傷、二四六、大僧正行基よみ給ひける)

〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕〔引〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔大〕〔集〕

54 みたてまつるたびごとにめづらしからむをばいかゞはせむ
〔三九・400〕

ふしてめるとこ珍らなる君なれば今しも逢へる心ちこそす
れ〔古今六帖第三、とて、三三三、素性〕〔拾〕〔余〕

55 月のすむ雪井をかけてしたふともこの世のやみに猶やまどは
む〔三九七・402〕

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

〔後撰集卷十五、雑下、二三、太政大臣の左大将にてすまひの
かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとど
めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のう
へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、三
三三、〕〔迷ひぬるかな〕・大和物語、三二・兼輔集、一三三、
子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言〕〔事〕〔集〕
56 おはふかたのうきにつけてはいとへどもいつかこの世をそむ
きはつべき〔三九七・402〕

百敷の内のみつねに恋しくて雲の八重立つ山はすみうし
〔新古今集卷十六、雑下、三七、御かへし 如寛・大鏡卷四、
九七〕〔弄〕〔孟〕〔下句ノミ、〕〔二〕〔細〕〔峴〕〔湖〕〔余〕九重の

〔初句、〕〔休〕

57 とけわたるいけのうすこほり〔三九八・404〕

※うすこほり―うすらひ河

佐保河に凍り渡れる薄氷のうすき心をわが思はなくに〔万

葉集卷二十、四六、大原桜井の夏人・古今六帖第三、橋、三三
三、同第三、ひろ、三三三〕〔河〕〔休〕うすき心も、〔孟〕勿
句ノミ、〕〔さほ川の〕、〔峴〕

58 むべも心あるとしのびやかにかにうちずし給へるまたなうなまめ
かし ながめかるあまのすみかともみるからにまづしほたるゝ
まつがうら島〔三九九・404〕

音にきく松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり
〔後撰集卷十五、雑下、二四、西院の後おほんぐしおろさせ給
ひておこなはせ給ひける時彼院の中島の松をけつりてかき
つけ侍りける 素性法師・素性法師集、一五三、前斎院の
后御ぐしおろして行はせ給ひける時かの院の中島の松をけ
つりて書きつけ侍りける、〕うべ心ある〕〔釈前〕〔釈宮〕
きてみればうべこゝろあるあまもすみけり、〔釈書〕〔休〕
きてみればむべ心ある、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初句ノ
ミ、〕〔二〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔余〕むべ心ある、〔峴〕〔湖〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

59 はしものものとさうびけしばかりさきて〔三九五・407〕

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物と云ふべかり
けり〔古今集卷十六、物名、四六、さうび 貫之・古今六帖第
六、さうび、三三三〕〔河〕いふべかりける、〔細〕〔峴〕

〔湖〕〔集〕

60 あはまし物をさゆりばのとうたふとちめに〔三九四・408〕

高砂の さいささこの 高砂の 尾上に立てる 白玉 玉

61

椿 玉柳 それもがと さむ 汝もがと 汝もがと 練緒
 染緒の 御衣架にせむ 玉柳 何しかも さ 何しかも
 何しかも 心もまたいけむ 百合花の さ百合花の 今朝
 咲いたる 初花に あはましものを さゆり花の (催馬
 楽、高砂、三) 八細V(孟)(湖)(余)(集)

それもかときさひらけたる初花におとらぬ君がにほひをぞみ
 るほをゑみてとり給 ときならでけさ咲はなは夏の雨にしほ
 れにけらしにはふほどなく (三四二・408)

①高砂の さいささこの 高砂の 尾上に立てる 白玉 玉

椿 玉柳 それもがと さむ 汝もがと 汝もがと 練緒
 染緒の 御衣架にせむ 玉柳 何しかも さ 何しかも

何しかも 心もまたいけむ 百合花の さ百合花の 今朝
 咲いたる 初花に あはましものを さゆり花の (催馬

楽、高砂、三) (釈前)多可左古ッ、乃於右伊左、古於乃一

太加左^安乃宇乃戸^安余ッ、太天留ッ、之良多末太川波木一多

末世安名支曾礼毛加^安於左安平末之毛於可止末之毛於可

度 〓 祢利乎於左安美乎乃於見曾加介ッ、余世乎多万世名支

余之加安と毛於沙由利波安と名乃 〓 余左之伊多留 〓 波川波

名余ッ、安波安と万万之毛乃乎一沙由利波安名乃 〓、八釈

宮V、(奥)たかさこの左伊左、古乃太加左乎乃戸尔太天

留之良太末川波木多万や名支曾礼毛加と左牟末之毛可止

末之毛可度祢利乎左美乎の見曾加介尔世牟多万や多支名

尔之加毛沙名尔之加毛名尔之加毛古々呂毛万多伊介牟由

利波名乃沙由利波名乃介左々伊多留波川波名尔安波末之

62

毛乃乎左由利波名の、(紫)(異)(河)(花) 八弄V八一V
 八細V(休)(紹)(岷)(引)(全)(対)(事)(大)

②我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物と云ふべかり
 けり (古今六帖第十、物名、雲、さうび 貫之・古今六帖
 第六、さうび、三四三) (弄)(二)(細) (第二句ノミ、(孟、
 (新) (上句ノミ、(余)

いとしのびてたびかさなりゆけばけしきみる人々もあるべか
 めれど (三四四・409)

逢ふことを阿漕の島に曳網のたび重ならば人も知りなむ

(古今六帖第三、鯛、三三六) (拾)(余)

花散里

1 ひとしれぬ御心づからの物おもはしきは (三六二・417)

春風は花のあたりをよぎてふけ心づからや移ろふとみむ

(古今集卷三、春下、三、春宮のたち花の陣にて桜の花のち
るをよめる 藤原好風・古今六帖第一、春の風、三三三、藤
原好風) (河) (孟) (拾) (余)

2 たゞならずほどへにけるおほめかしくやとつゝましかれど

(三六二・418)

① 夢のごとおほめかれ行く世の中にいつ訪はむとか音信もせ
ぬ (後拾遺集卷五、雑一、八六、馬のなしいしが許に遣はしけ
る 斎宮女御) (拾) (余)

② おほめく誰ともなくて宵々に夢にみえけむ我ぞその人
(後拾遺集卷五、恋一、六二、男のはじめて人のもとにかは
しけるにかはりてよめる 和泉式部) (拾) (余)

③ 郭公はつかなる音を聞き初めてあらぬもそれとおほめかれ
つゝ (後撰集卷四、夏、一六六、女の物見にまかりたりけるに
こと車傍に來りけるに物などいひかはして後につかはしけ
る 伊勢) (余)

3 すぎがてにやすらひたまふおりしも (三六二・418)

夜やくらき道や惑へるときすわが宿をしも過ぎがてに
鳴く (古今集卷三、夏、二四、寛平の御時きさいの宮の歌合
の歌 紀友則・古今六帖第六、ほとゝぎす、三三三、友則、

「わが宿にしも」・寛平御時后宮歌合、三四〇、「過ぎがてに
する」・友則集、一四〇、寛平の御時中宮の歌合 (異
(河) (孟) (事)

4 ほとゝぎすなきてわたるもよをしきこえがほなれば (三六三・
418)

ほとゝぎすはつ声きけばあぢきなくぬし定まらぬ恋せらる
はた (古今集卷三、夏、二四、郭公の始めて鳴きけるを聞き
てよめる 業性) (岷) なく声きけは

5 おちかへりえぞしのばれぬほとゝぎすのかたらひしやどの
かきねに (三六五・418)

① たちばなの花ちる里のほとゝぎす片恋しつゝなく日しぞ多
き (古今六帖第六、時鳥、三五五、大宰帥大伴卿・万葉集卷
八、夏雜歌、一四三、大宰帥大伴卿・続古今集卷三、夏、二五)

(休) 香をなつかしみ…かたらひしつゝなかなぬ日ぞなき
② 郭公をちかへりなけうなるこが打ちたれ髪五月雨の空
(拾遺集卷三、夏、二六、定文が家の歌合に 躬恒・躬恒集、
三四六、中の夏、「わきも子が」) (拾) (余)

6 うへしかきねもとていつるを人しれぬ心には (三六二・418)

① 花ちりし庭の梢もしげりあひてうゑしきき根もえこそ見わ
かね (未詳) (紫) (異) 庭のこの葉も…見こそわかれね、
(河) 庭の木の葉も…みこそわかれね、(弄)、(一) 庭の木
の葉も…見えこそわかれね、(細)、(休) 庭の木の葉も、
(紹)、(孟) みえこそわかれね、(岷) (湖) (拾)、(新) (第二
五句ノミ)、(余) (全) (対) (事) (大) (評) (集)

②かこはねど蓬のまがき夏くればうゑしかき根もしげりあひにけり (参考・曾丹集、三三〇)、「あばらの宿も面がくしつゝ」 (奥) (紫) (異) (河) (休)、「(孟)よもぎのかきね」茂りあひけり、「(屋)しげりあひけり」 (岷) (引) (全) (事) (評)

③花散りし庭の木のまま繁りあひて天照る月の影ぞまれなる (曾丹集、三四四・新古今集卷三、夏、一六、題しらず 曾祢好忠) (拾) (余)

7 ちかきたちはなのかほりなつかしくにはひて (三六四・四九)

たちはなの花散る里の郭公片恋ひしつゝなく日しぞ多き

(古今六帖第六、時鳥、三三九・続古今集卷三、夏、三三、題しらず 大納言旅人・万葉集卷六、二四三) (異)かをなつかしみ…なかなぬ日ぞなき

8 いかにしりてかなどしのびやかにうちずんじ給 (三六九・九)

419

①古のこと語らへはほとときすいかに知りてか古声のする

(古今六帖第三、物がたり、三三三・兼輔集、一六四、枇杷殿にまでたりければ昔物語し給ふとて北面によび合せてふることありける中に、「いかにしてかは」 (釈前) (紫)

(異) (休) (紹) (孟) (岷) (引) ふることゑに鳴く、「(釈宮)ことかたらはん…ふることゑにする、(釈書)事かたらひし…心にしりてかふるこゑになく、(奥)なくこゑもする (第五包) (河) ふる声になく (なくこゑのする) (一) (細) (湖) (余) なく声のする、(屋) (新) (全) (対) (事) (大) (評) (集)

②時鳥鳴きてひゞかす橘の花散るやどにくる人やたれ (赤人集、詠花、一三三) (異)花散るさとする人やたれ

9 たち花のかをなつかしみほとゝぎすはなちるさとをたづねてぞとふ (三六九・四九)

①橘の花ちる里のほとときすかた恋しつゝなく日しぞおほき (古今六帖第六、ほとときす、三三九、太宰帥大伴卿・万葉集卷六、二四三、太宰帥大伴卿) (奥) (紫) (河) (孟) (岷) (湖) (引) (新) かをなつかしみ…がたらひしつゝなかなぬ日ぞなき、(玉) (余) (事) (評) (集)

②橘の花散る里に通ひなば山ほとときす響さむかも (万葉集卷六、一七六、譬喻歌・赤人集、一三五、たとひうた、「ひゞかざらむか」 (河) とよもせんかも、(細) (休) (岷) (湖) とよもせんかも、(紹) (孟) (新)

③郭公なきて日数をたち花の花ちる里に住む人やたれ (未詳) (河) (孟) (岷)

④鶯の 生卵の中に 霍公鳥 独り生れて 己が父に 似て

は鳴かず 己が母に 似ては鳴かず 卵の花の 咲きたる

野辺ゆ 飛びかけり 来鳴き響もし 橘の花を居散らし終日に 鳴けど聞きよし 幣はせむ 遠くな行きそ わが屋戸の 花橘に 住み渡れ鳥 (万葉集卷六、一七五、霍公鳥を詠む) (河) かひこのなかの…しやがち…しやがは…に…さける野べよりとびかへりなきとよまし…なけばき…よし、(孟) かいこのなかの…しやがち…に…ては

なかずや…さけるのべよりとびかへりなきとよまして…

須磨

なけばきよよし…とをくは行そ、(岷)かひこの中の…し
やがちゝに…しやがはゝににては鳴すや…さけるのべよ
りとびかへりき鳴きとよまし…なけばきよよしよひはせ
ん

⑤さつまつはな橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする (古
今集卷三、夏、三三、題しらず 読人しらず・古今六帖第六、
橘、三〇六、いせ・伊勢物語、三三、和漢朗詠集卷上、夏、
花橘、二三) (対)(事)(大)(評)(集)

10
ひとめなくあれたるやどはたちばなのはなこそきのつまと
なりけれ (三〇四・4・420)

年ごとにきつゝ声する時鳥はな橘やつまとなるらむ (貫之
集、二五五、人の家に花橘のある所・古今六帖第六、たちは
な、三〇九) (余)

11
あいなしと思人はとにかくにかはることほりのよのさがとお
もひなしたまふ (三〇五・11・420)

こゝにしも何匂ふらむ女郎花人の物いひさが憎き世に (遍
昭集、二八六、嵯峨に侍りし法師の坊の前に前栽のはべり
けるを女どものたちどまりて見侍りしかば・拾遺集卷七、
雑秋、二〇六、房の前栽見に女どもまうで来りければ 僧正
遍昭) (異)

1
かのすまはむかしこそ人のすみかなどもありけれ (三〇二・
11)

わくらばに問ふ人あらばすまの浦に藻塩垂れつゝわぶと答
へよ (古今集卷六、雑下、六三、田村の御時に事にあたり
て津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍
りける人に遣はしける 在原行平朝臣・古今六帖第三、し
ほ、三〇四) 八一〇〇八細〇

2
ゆきめぐりても又あひみむ事をかならずとおぼさむにてだに
(三〇九・11)

①身ひとつにあらぬばかりをおしなべて行きめぐりてもなど
か見ざらむ (後撰集卷九、離別、三三、帝御覧じて御かへ
し 亭子院) (異)

②下の帯の道はかたがた別るとも行きめぐりても逢はむとぞ
思ふ (古今集卷六、離別、四三、道にあへりける人の車に物
をいひつぎて別れける所にてよめる 友則・古今六帖第五、
おび、三〇三、友則・友則集、二五五、物へいく道に來逢ひ
て物などいふ人に別るとて) (岷)(湖)(引)(新)(余)(全)

(対)(事)(大)(評)(集)

3
あふをかぎりにへだりゆかぬもさだめなき世に (三〇二・
12)

我が恋は行方も知らずはてもなしあふを限りと思ふばかり

ぞ〔古今集卷三、恋三、六二、題しらず 躬恒・古今六帖第四、恋、三八五・和漢朗詠集卷下、恋、七五、躬恒〕〔河〕、〔弄〕〔第二句ノミ〕、〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕、〔唄〕はてもなく、〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

4 やがてわかるべきかどでもやといみじうおほへ給へば〔三〕〔十二・12〕

かり初めの行きかひちとぞ思ひこし今はかぎりの門出なりけり〔古今集卷六、哀傷、六三、甲斐の国にあひ知りて侍りける人とぶらはむとてまかりける道なかにてにはかに病ひをしていまいまとなりければよみて京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍りける歌 在原滋春・大和物語、六三、「思ひしを」〔紫〕、〔河〕いまは別れの、〔弄〕〔上句ノミ〕、〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕、〔唄〕今を限りの門出なりける、〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

5 二三日かねてよにかくれておほいどのにわたり給へり〔三〕〔一・13〕

よに隠れきつるかひなく紅葉はも月に赤くぞ照りまさりける〔貫之集、二四三、延長六年中宮の御屏風の歌四首右近衛中将うけ給はりて・古今六帖第一、秋の月、三二六、「月は明くも照り増る哉」〕〔拾〕〔余〕〔対〕

6 中納言の君いへばえにかなしうおもへるさまを〔三〕〔九・15〕

① いへばえに深く悲しき笛竹の夜声やたれとふ人もがな、〔古今六帖第五、笛、三三三〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔弄〕

八 一 〔五〕〔唄〕〔湖〕〔事〕〔評〕

② いへばえにいはねば胸にさわがれて心ひとつに歎くころかな〔伊勢物語、三〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔唄〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

③ いへばえにいはねば苦し世の中を歎きてのみもつくすべき哉〔古今六帖第四、うらみ、三三六、「過ぐすべきかな」〕

〔玉〕〔余〕

7 とりべ山もえしけおりもまがふやとあまのしほやくうらみにぞゆく〔四〇〇・16〕

① 鳥部山谷に煙のもえたつははかなく見えし我と知らなむ〔拾遺集卷三、哀傷、三四、題しらず よみ人しらず〕

〔拾〕

② みし人のけおりとなりし夕より名もむつまじき塩がまの浦〔紫式部集、三六三、世のはかなきことを歎く頃陸奥の名ある所々かいたるを見て、しほがまの浦・新古今集卷六、哀傷、二〇、世のはかなき事なげく頃みちの国に名ある所々かきたる絵を見侍りて 紫式部〕〔拾〕〔余〕

③ 須磨の海人のしほ焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり〔古今集卷四、恋四、七六、題しらず 読人しらず・伊勢物語、三六・古今六帖第一、煙、三六六、「伊勢のあまの」・同第三、しほ、三六七、「伊勢のあまの」〕〔事〕

8 あか月のわかればかうのみや心づくしなる〔四〇九・17〕
いかで我人にもとはむ暁のあかぬ別れやなにゝ似たりと〔後撰集卷十一、恋三、七三、題しらず 貫之・古今六帖第五、

ふせり、三三〇四〔集〕

9 なき人のわかれやいとどへだくらむけふりとなりし雲井なら
では(四二五・17)

こふるまに年のくれなば亡き人の別れやいとど遠くなりな
む(後撰集卷十、哀傷、二四六、かへし 貫之・古今六帖第
四、かなしび、三三〇三・貫之集、二七六、兼輔の中將のめう
せにける年の師走の晦日にいたりて物語するついでに昔を
恋ひしのび給ふによめる)〔異〕

10 とし月をへばいはほのなかにもむかへたてまつらむ(四二二・
19)

① いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞えこざら
む(古今集卷十、雑下、五三、題しらず 読人しらず・古
今六帖第三いはほ、三六六、「住まへばか尋ね来ざらむ」
〔岷〕、〔拾〕〔上句ノミ〕、〔新〕〔上句ノミ〕、「こもるとも」〔
余〕〔全〕〔事〕〔評〕〔集〕

② 事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひわが夫

(万葉集卷十、三〇六)〔新〕

11 身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬかゞみのかげは
はなれじ(四三十四・20)

身をわくることのかたさに増鏡影ばかりをぞ君にそへつる
(後撰集卷十、離別、二三三、遠き国にまかりける人に旅の
具つかはしける鏡の箱のうちにかけつけて遣はしける 大
窪則善・古今六帖第三、かゞみ、四四七、「君に添ひつる」
〔集〕

12 すみはなれたらむいはほのなかおほしやらる(四四二・21)

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことのきこえこざ
らむ(古今集卷十、雑下、五三、題しらず 読人しらず・
古今六帖第三いはほ、三六六、「住まへばか尋ね来ざら
む」〔卷〕〔河〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔余〕〔引〕〔事〕〔大〕
ことなしにてすぐしつるとしころもくやしうきしかたゆくさ
きのためしになるべき身にて(四四三・22)

① 君みずて程の古屋のひさしには逢ふ事なしの草ぞ生ひける
(新勅撰集卷十、恋三、五五、題しらず 読人しらず)〔奥〕

〔卷〕〔異〕、〔河〕〔孟〕〔下句ノミ〕、〔休〕君すまで草ぞ生ひ
ぬる、〔細〕君住みてほどもふる屋の、〔集〕、〔細〕

〔岷〕〔引歌に及ばざる歟〕

② むら鳥の立ちにし我が名今更にことなしぶともしるしあら
めや(古今集卷十、恋三、六五、古今六帖第六、とり、三三七

〔卷〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔湖〕

③ 床夏の花をだにみばことなしにすぐす月日も短かゝりなむ

(後撰集卷十、夏、三〇〇、題しらず 読人しらず)〔異〕〔河〕

すぐる月日も、〔孟〕

14 女君のこき御ぞにうつりてげにぬるゝかほなれば(四四六・
22)

逢ひにあひてもの思ふ頃のわが袖に宿る月さへぬるゝ顔な
る(古今集卷十、恋三、五五、題しらず 伊勢・後撰集卷十、
雑四、三三三、物思ひける頃 伊勢・古今六帖第一、雑の月、
三三〇六、伊勢・伊勢集、二二三、世の中の憂きこと歎く人、

「わが袖は」〔釈前〕〔釈宮〕、〔釈書〕ぬるゝかほなり、

〔奥〕〔紫〕わが袖は、〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔一〕〔細〕〔休〕、〔絶〕物思ふ比は、〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

15 たゞしらぬ涙のみこそ心をくらすものなれ〔四〕〔五〕〔二〕〔二〕

行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり〔後撰集卷十六、離別〕〔一〕〔三〕、出羽よりのほりけるにこれかれ馬のはなむけしけるにかはらけとりて 源濟

〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔一〕〔細〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

16 あふせなきなみだの河にしづみしやながるゝみおのはじめなりけむ〔四〕〔五〕〔二〕〔二〕

①君が行く方において涙川まづは袖にぞながるべらなる〔後撰集卷十六、離別、一三六〕、をとこの伊勢国へまかりけるに〔河〕〔孟〕〔引〕

②いせ渡る川は袖より流るればとふにとはれぬ身は浮きぬめり〔後撰集卷十六、離別、一三五、題しらず 伊勢〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕なみだ川渡る袖より流るれど

17 いまひとたびたいめなくてやおぼすは〔四〕〔五〕〔二〕〔二〕

あらざらむこの世のはかの思ひ出に今ひとたびのあふこともがな〔和泉式部集、四六五、こゝちあしきころ人に・後拾遺集卷十三、恋三、七三、心地れいならす侍りけるころ人のもとにつかはしける 和泉式部〕〔集〕

18 みしはなくあるはかなしきよのはてをそむきしかひもなく

くぞふる〔四〕〔五〕〔二〕〔二〕

①あるはなく無きは数そふ世の中にあはれいつれの日まで歎かむ〔小町集、一六六、見し人のなくなりし頃・為頼朝臣集、四四四、小大君これを聞きて、「あはれいつまで生きむとすらむ」〕〔異〕あはれいつまであらむとすらん、〔河〕

〔休〕〔絶〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔拾〕〔第二句ノミ〕、〔余〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりける哉〔拾遺集卷十六、哀傷、三三六、むかし見侍りし人々多くなくなりたることを歎くを見侍りて 藤原為頼・栄花物語、見はてぬ夢、三五、藤原為頼・前大納言公任卿集、三〇六、又の年法さう寺の御八講の日 為頼・為頼朝臣集、四四四、小野の宮の御日に法住寺に参るとて同じ程の人の多く参りしを思ひいでゝ・和漢朗詠集卷下、懷旧、五五〕〔拾〕〔余〕

19 世になくなりぬる人ぞいはむかたなくくちおしきわざなりける〔四〕〔五〕〔二〕〔二〕

うけれどといけるはさてもあるものをしぬるのみこそ悲しかりけれ〔貫之集、二九六、世の中のはかなきことを見て・古今六帖第四、かなしび、三三二〕〔拾〕〔余〕

20 さきてとくちるはうけれどゆく春は花のみやこをたちかへりみよ〔四〕〔五〕〔二〕〔二〕

光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散るもの思ひもなし〔古今集卷十六、雑下、六六、時なりける人の俄に時なくなりて歎くを見てみづからのなげきもなくよろこびもなき

ことを思ひてよめる 清原深養父・古今六帖第三、谷、三、八へ、深養父、「光待つ」(初句)〔異〕、「花」(休)谷には春の、〔紹〕〔孟〕〔引〕、「拾」(下句ノミ)、「新」〔余〕〔事〕〔集〕

21 おはえど²¹のといひける所はいたうあれて松ばかりぞしるしなる(四三・五・30)

わたのべや大江の岸に宿りして雲居にみゆる伊駒山かな(後拾遺集卷六、羈旅、三三、津の国にくだりて侍りけるに旅宿遠望の心をよみ侍りける 良運法師)〔紫〕〔異〕〔河〕

〔孟〕〔眠〕、「湖」〔余〕わたのべの、〔新〕(第二句ノミ)、

22 なぎさによるなみのかつがつかへるをみ給てうらやましくもとうちずしたまへるさま(四三・七・30)

いとゞしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも返る波かな(後撰集卷六、羈旅、三三、東へ罷りけるにすぎぬる方恋しく覚えける程に川を渡りけるに浪の立ちけるを見て 業平朝臣・伊勢物語、三三)〔釈前〕〔釈宮〕〔奥〕〔紫〕〔異〕

〔河〕、「弄」(初句ノミ)、「一」(上句ノミ)、「細」(休)〔紹〕〔孟〕

〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

23 うちかへりみたまへるにこしかたの山はかすみはるかにて(四三・一〇・30)

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ(古今集卷六、羈旅、四三、あづまの方より京へまうでくとて道にてよめる おと・古今六帖第三、都、三〇、六)〔新〕

24 まことに三千里のほかの心ちするにかいのしづくもたへがたし(四三・一〇・30)

①このゆふべ降り来る雨は彦星の早漕ぐ船の櫂の散沫^{はちり}かも(万葉集卷十、三三三・家持集、二五三、「天の川とく漕ぐ舟のかひのしづくか」・赤人集、一六〇六、「とく漕ぐ舟の櫂のしづくか」・新古今集卷四、秋上、三四、「と渡るふねのかいのしづか」)〔紫〕〔河〕〔孟〕〔眠〕七夕のとわたる舟のかいのしづか、〔紹〕天の川とわたる舟のかいの雲か

②わが上に露ぞ置くなる天の川と渡る舟の櫂の雲か(古今集卷七、雑上、六三、題しらず 読人しらず・伊勢物語、三三)〔紫〕〔河〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕(上句ノミ)、「拾」〔余〕〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

25 つらからぬものなむおはすべき所は行平の中納言の(四三・一二・30)

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ(古今集卷六、羈旅、四三、あづまの方より京へまうでくとて道にてよめる おと・古今六帖第三、都、三〇、六)〔眠〕

26 おはすべき所はゆきひらの中納言のもしはたれつゝわびけるいへるちかき(四三・一三・30)

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻しはたれつつわぶと答へよ(古今集卷六、雑下、六三、田村の御時に事にあたりて津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣はしける 在原行平朝臣・古今六帖第三、しほ、三六四、行平)〔釈前〕〔釈宮〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕

〔河〕、「一」(第二句ノミ)、「休」〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕

〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

27 しらぬくにの心ちしていとむもれいたくいかでとし月をすぐ
さましと(四四九・31)

ひさかたの雨の降る日をただ独り山辺にをればいふせかり
けり(万葉集卷四、其六、大伴宿祢家持・拾遺集卷六、雑
恋、二三、紀の郎女におくり侍りける 中納言家持、「う
もれたりけり」(拾)(新)(余)

28 松しまのあまのときやまいかならむすまのうら人しはたるゝ
ころ(四五一・31)

①ふるさとを恋ふるたもともかわかぬにまたしはたるゝあま
もありけり(拾遺集卷六、雑恋、三三、人の国へまかりけ
るに蟹のしはたれ侍りけるを見て 惠慶法師)(余)

②音にきく松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり
(後撰集卷五、雑、二四、西院の後おほんぐしおろさせ給
ひておこなはせ給ひける時彼院の中島の松をけつりてかき
つけ侍りける 素性法師・素性法師集、二五、前斎院の
后御ぐしおろして行はせ給ひける時の院の中島の松をけ
つりて書きつけ侍りける、「うべ心ある」(事)

③わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻しほ垂れつゝわぶと
答へよ(古今集卷六、雑下、六三、田村の御時に事にあた
りて津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに
侍りける人に遣はしける 在原行平朝臣・古今六帖第三、
しほ、三六、行平)(事)

29 きしかたゆくさきかきくらしみぎはまさりてなん(四二五・2・
31)

①君惜しむ涙落ちそひこの河の汀まさりて流るべらなり

(古今六帖第四、別、三三、貫之集、一九、兼輔の兵衛の
すけ賀茂川のはとりにて左衛門尉みはるのありすけの甲斐
へ行くうまのはなむけによめる、「君を惜しむ涙おちそふ」
[異]君恋ふる…かへるべらなり、[花]細[休][岷][湖]
[引][新]君恋ふる…思ふべらなり、[紹][孟][屋]君恋ふ
る、[全][対][事][大][評][集]、八一V(引歌までもな
きか)

②行く人もとまるも袖の涙川みぎはのみこそぬれまさりけれ
(土佐日記、七)(余)

30 こりすまのうらのみるめのゆかしきをしはやくあまやいかゞ
おもはん(四二五・31)

①白波は立ち騒ぐともこりすまの浦のみるめは刈らむとぞ思
ふ(古今六帖第三、みるめ、三三、奥)[紫]、[異]すま
の浦の(第三句)、[河]あまのみるめは[孟][湖][新][余]
立ち騒げども、[休]、[紹]白波の、[岷][引][事][大][集]
②こりすにまたも無き名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住
まへば(古今集卷三、恋三、三三、題しらず 読人しらず)
(事)

③須磨の海人のしほ焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきに
けり(古今集卷四、恋四、七六、題しらず 読人しらず・伊
勢物語、二六・古今六帖第一、煙、三六、[伊勢のあまの]・
同第三、しほ、三六、[伊勢のあまの])(事)

31 よりゐたまひしまきばしらなどをみたまふにもむねのみふた

がりて (四六三・32)

わきもこが来ては寄りたつ真木柱そもむつまじやゆかりと思へば (未詳) (紫)、「異」わがせこが、(河) (休)、「紹」(拾) (余) きてはよりそふ、(孟) (岷) (湖)、「引」さもむつまじな、(新) (全) (事) (大) (集)

32 やうくわすれぐさもおひやすらん (四六六・32)

こふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへやおひ茂るらむ (古今集卷十五、恋五、六、題しらず 読人しらず) (河) (休) (紹) (孟) (岷) (余) (大) (集)

33 いつまでとかぎりある御わかれにもあらで (四六七・33)

別れてはいつ逢ひ見むと思ふらむ限りあるよの命ともなし (後撰集卷十六、離別、二三〇、善祐法師の伊豆国に流され侍りけるに 伊勢・伊勢集、一八三三・古今六帖第四、別、三三三) (花) (一) (休) (紹) (孟) (岷) (湖) (新) (余) (大)

34 しはたるゝことをやくにてまつしまにしふるあまもなげきをぞつむ (四七三・33)

①秋までの命もしらず春の野に萩の古枝をやくときくかな (後拾遺集卷一、春上、四、題しらず 和泉式部・和泉式部集、四〇四三、「春の野の…やきとやくかな」) (河) (湖) (拾) 春のゝの…やくとやくかな、(岷) (余)

②四方の海に塩焼くあまの心から焼くとはかゝる歎きをやつむ (紫式部集、三〇二、「うたゑに海士の塩やくかたをかきてこりつみたるなげきのもとにかきて返しやる・続千載集卷七、雑中、二六六、歌絵に海士の汐やく所にこりつみたる

木のもとにかきて人の許に遣しける 紫式部、「塩くむあまの」 (拾) (新) (余)

③よさの海のおまのしわざとみし物をさもわが焼くとたるるしほかな (和泉式部集、四〇七五・新拾遺集卷十二、恋二、三〇六、題しらず 和泉式部、「しはたるゝかな」) (拾) (余) しはたるゝかな

④ふるさとを恋ふるたもともかわかぬにまたしはたるゝあまもありけり (拾遺集卷十六、雑恋、三、六、人の国へまかりけるに蟹のしはたれ侍りけるを見て 惠慶法師) (余) (下句ノミ)

⑤音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり (後撰集卷十五、雑一、二四四、西院の後おほんぐしおろさせ給ひておこなはせ給ひける時彼院の中島の松をけつりてかきつけ侍りける 素性法師・素性法師集、一四四四、前斎院の後御ぐしおろして行はせ給ひける時かの院の中島の松をけつりて書きつけ侍りける、「うへ心ある」) (事)

35 浦にたくあまだにつゝむこひなればくゆるけおりよくかたぞなき (四七五・33)

風を痛みくゆる煙の立ちいでゝ猶こりずまの浦ぞ恋しき (後撰集卷三、恋四、八、六、人のむすめのもとに忍びつゝ通ひ侍りけるを親聞きつけていといたくいひければかへりてつかはしける 貫之) (花) (弄) (休) (孟) 浦ぞかなしき、(岷)

36 中くこの道にまどはれぬにやあらむ (四八四・34)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

(後撰集卷五、雜一、二三、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞめてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、三三

三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、二三、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言) (異(新)まよひぬるかな、(弄)(一)(第二句ノミ)、(細)(上句ノミ、

(休(紹)(孟(岷(引)(全(対)(大(評(集

37 御すまゐるをうけ給はるもあけぬ夜の心まどひかとなん (四六八・35)

①あふことのあけぬ夜ながら明けぬれば我こそ帰れ心やはゆく (伊勢集、二二番・新古今集卷三、恋三、二六、題しらず

伊勢) (屋)

②明けぬ夜の心地ながらにやみにしを朝倉といひし声はききや (後拾遺集卷六、雜四、二〇三、実方の朝臣女の許にま

うで来て格子をならし侍りけるに女の心しらぬ人してあらくましげに問はせて侍ければ帰る侍りにけり、つとめて女の遣しける 読人しらず) (異)

38 うきめかるいせをのあまを思ひやれもしはたるてふすまのうらにて (四二八・35)

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻しほ垂れつゝわぶと答へよ (古今集卷六、雜下、三三、田村の御時に事にあた

りて津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣はしける 在原行平朝臣・古今六帖第三、しほ、三六四、行平) (対(事(集

39 いせしまやしほのかたにあさりてもいふかひなきは我身なりけり (四二八・35)

①しほのまにあさりするあまも己がよゝかひありとこそ思ふべらなれ (後撰集卷二、恋三、三三、心ざしありていひかはしける女のもとより人数ならぬやうにいひ侍りければ 長谷雄朝臣) (拾(余)

②潮のまによもの浦々求むれば今はわが身のいふかひもなし (和泉式部集、四二二・新古今集卷六、雜下、二四、題しらず 和泉式部、「尋ぬれど今ぞわが身のいふかひぞなし」

(拾(新(余) 尋ぬれど

③須磨の浦にあさりするあまの大方はかひあるよとぞ思ふべらなる (兼盛集、須磨、三〇六、拾(余)

④あさりしてかひ有りけりと思ふ身を恨みてふると人やみるらむ (中務集、三六六、あさりしたる所) (拾(余)

40 伊勢人の浪のうへこぐをぶねにもうきめはからでのらましもの (四二八・36)

伊勢人は あやしき者をや 何と言へば 小舟に乗りてや波の上を漕ぐや 波の上を漕ぐや (風俗歌、伊勢人、三三)

(異(河(弄(一(休(紹(孟(岷(湖(余(引(拾(全(対(事(大(評(集

41 あまがつむなげきのなかにしはたれていつまですまのうらに

ながめむ (四六・36)

わくらばに問ふ人あらは須磨の浦に藻しは垂れつゝわぶと答へよ (古今集卷六、雑下、六三、田村の御時に事にあたりて津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣はしける 在原行平朝臣・古今六帖第三、しほ、三六四、行平) (事)

42 げにむぐらよりほかのうしろみもなきさまにて (四二・4・36)

① 今更にとふべき人も思はず八重葎してかどさせりてへ (古今集卷六、雑下、六三、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、くれどあはず、三六六) (異)、(河) (下句ノミ、(休) (絶) (孟) (屋))

② とふ人もなき宿なれどくる春は八重葎にもさはらざりけり

(貫之集、一四三、三条右大臣殿の御屏風の歌・古今六帖第三、やど、三六六・新勅撰集卷一、春上、へ、三条右大臣の家の屏風に 貫之) (異)

③ 八重葎しげれる宿の寂しきに人こそみえね秋はきにけり

(拾遺集卷三、秋、四〇、河原院にて荒れたる宿に秋来るといふころを人々よみ侍りけるに 恵慶法師) (異)

43 いける世にとはげによからぬ人のいひをきけむと (四三・6・37)

① 恋死なむ後は何せむ生ける日のためこそ人は見まくほしけれ (拾遺集卷十二、恋一、六三、題しらず 大伴百世・古今六帖第四、恋、三六四・万葉集卷四、異)、大宰大監大伴宿称百

代の恋の歌、「時は何せむ…ためこそ妹を見まく欲りすれ」

・同卷十二、三六四、「わが命生ける日にこそ見まくほりすれ」(釈前)(釈宮)(紫)(異)(河)(孟)いける身の、(弄)第二句ノミ、(一)いける世の、(細)(休)(紹)(屋)(眠)

(湖)(新)(余)(全)(対)(事)(大)(評)(集)

② 生ける代に恋といふものを相見ねば恋の中にも我ぞ苦しき

(万葉集卷十二、三六四) (大)

44 すまにはいと心づくしの秋風にうみはすこしとをけれど (四三・12・38)

木の間よりもりくる月の影みれば心づくしの秋は来にけり

(古今集卷四、秋上、一四、題しらず 読人しらず・古今六帖第一、秋の月、三二七) (紫)(異)(河)(孟)(湖)(引)

(新)(余)(全)(対)(事)(大)(評)(集)

45 ゆきひらの中納言のせきふきこゆるといひけんうらなみよる

くはげにいとちかくきこえて (四三・13・38)

① 秋風の関吹き越ゆるたびごとに声うちそふる須磨の浦波

(忠見集、三六五、秋須磨の浦に関あり) (釈前) なくねをそふる、(花)(一)(細)(休)(孟)(眠)(全)(事)(評)

② 旅人はたもと涼しくなりけり関吹き越ゆる須磨の浦風

(続古今集卷十、羈旅、八六、津の国須磨といふ所に侍りける時よみ侍りける 中納言行平) (釈前) 旅人の…なりぬ

らし…しがの浦風、(釈宮) たび人の…なりぬらし…す

まの浦風、(釈書) たび人の…なりぬらし…志賀の浦風、

(紫)(河)(孟)旅人の…なりぬらし、(異)(河)(一)(休)

〔紹〕〔屋〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕旅人の、〔河〕④なりぬらし、
〔眠〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

46 涙おつともおぼえぬに枕うくばかりになりにつけり 四三二・38

① 涙川枕ながるゝうきねには夢も定かに見えすぞありける

〔古今集卷十一、恋一、三三、題しらず 読人しらず〕〔紫〕

〔異〕

② ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり

〔古今六帖第五、まぐら、四六七〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕

〔眠〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

③ 涙川みづまさればやしきたへの枕のうきて止らざるらむ

〔拾遺集卷十九、雑恋、三三、忠君宰相まさのぶがむすめに

まかり通ひてはどなくうどをもはこび返しければちん

の枕をそへて侍りけるを返しおこせたりければ よみ人し

らず〕〔花〕しろたへの〔第三句、〔休〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕

〔引〕〔新〕〔余〕〔大〕〔集〕

47 恋わびてなくねにまがふうらなみはおもふかたより風やふく

らん 四三三・38

波立たば沖の玉藻もよりくべく思ふ方より風も吹かなむ

〔躬恒集、一、雲・玉藻集卷五、雑二、三六、題しらず 躬

恒〕〔異〕〔河〕〔眠〕〔引〕よりぬべし、〔孟〕〔余〕〔大〕〔集〕

48 おきよりふねどものうたひのゝしりてこぎゆくなどもきこゆ

ほのかにたゞちひさきとりのうかべるとみやらるゝも 四三三

8・39

① 沖つ鳥鴨トビ著く島に我がる寝し妹は忘れじ世のことごと

〔古事記上、八・日本書紀卷三、二五、鴨づく島に妹は忘

らに世のことごと〕〔河〕〔眠〕かもつく島に、〔孟〕かも

つく島に…いもは忘れじ

② 沖つ鳥鴨といふ船の還り来ば也良の埼守早く告げこそ 〔万

葉集卷六、云々、筑前の国の志賀の白水郎の歌 山上憶良

〔河〕やがのさきもり、〔孟〕、〔眠〕かもといふ舟…やがの

さきもり

49 かりのつらねて声がちのをとにまがへるをうちながめ給て

〔四三三・39〕

秋風に声をはにあげてくる船は天のと渡る雁にぞ有ける

〔古今集卷四、秋上、三三、寛平の御時きさいの宮の歌合の

歌 藤原菅根朝臣・古今六帖第六、かり、三三三、雁にぞ

りける〕・寛平御時后宮歌合、三三三、藤原菅根朝臣、雁

にざりける〕〔休〕

50 はつかりはこひしき人のつらなれやたびのそらとぶこゑのか

なしき 四三三・39

① 待つ人にあらぬものから初雁のけさなく声の珍らしき哉

〔古今集卷四、秋上、三三、初雁をよめる 在原元方・古今

六帖第六、かり、三三三〕〔細〕〔紹〕〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔新〕

② 我が宿にきるる鷺羽を弱み訪はぬはつらき物にぞありける

〔古今六帖第六、うぐひす、三三三〕〔拾〕〔余〕

51 こゝろからとこよをすてゝなくかりをくものよそにもおもひ

けるかな 四三三・40

①君を待つ松浦の浦の娘^{むすめ}子らは常世の国の天娘子^{あまのむすめ}かも (万葉集卷六、八三) (河)〔孟〕

②春の日の霞^{あすけ}める時に 墨吉^{すみきち}の 岸に出で居て 釣舟^{つりふね}のとをらふ見れば 古の ことと思ほゆる 水江の 浦島子^{うみこ}が 鯉^{こい}釣り 鯛^{たう}釣り誇り 七日まで 家にも来ずて 海界^{うみかき}を 過ぎて漕ぎ行くに 海神^{わたづみ}の 神の娘子に たまさかに い漕ぎ向かひ 相とぶらひ 言成りしかば かき結び 常世に至り 海神の 神の宮の 内のへの 妙なる殿に 携はり 二人入り居て 老いもせず 死にせずして 永き世に ありけるものを 世の中の 愚か人の 我妹子に 告りて語らく しましくは 家に帰りて 父母に 事も語らひ 明日のごと 我は来なむと 言ひければ 妹が言へらく 常世^{とこよ}辺に また帰り来て 今のごと 逢はむとならば このくしげ 開くなゆめと そこらくに 堅めしことを 墨吉に 帰り来りて 家見れど 家も見かねて 里見れど 里も見かねて 怪しみと そこに思はく 家ゆ出でて 三年の間に 垣もなく 家失せめやと この箱を 開きて見れば ものごと 家はあらむと 玉くしげ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世^{とこよ}辺に たなびきぬれば 立ち走り 叫^{こゑ}び袖振り こいまろび 足ずりしつたちまちに 心消^{こゝろ}失せぬ 若かりし 肌も皺^{しわ}みぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶えて 後遂に 命死にける 水江の 浦島子が 家所見ゆ (万葉集卷六、一四〇) 水江の浦島子を詠む一首 (河)〔孟〕白雲の箱より出て

常世へに棚引きぬれば (二部ノミ)
③懸けまくも あやに畏^{おそ}し 皇神祖^{すめみこと}の 神の大御代に 田道^{たちみち}間守 常世に渡り 八矛^{やみ}持ち 参^{まゐ}り来し時 時じくの 香

の木の実を 畏くも 遺^{のこ}したまへれ 国も狭に 生ひ立ち 栄え 春されば 孫枝^{ひまゑ}萌^もいつつ 霍公鳥^{くわくこうとり} 鳴く五月には 初花^{はつはな}を 枝に手折りて 少女^{せうにょ}らに 裏にも遣りみ 白栲^{しろたへ}の 袖にも扱^と入れ 香細^{かほこ}しめ 置きて枯らしみ あゆる実は 玉に貫きつつ 手に纏^{まと}きて 見れども飽かず 秋づけば 時雨の雨降り あしひきの 山の木末^{きのみへ}は 紅に にはひ散れども 橘の 成れるその実は 直照^{ちかてる}りに 弥見^{やみ}が欲しく み雪降る 冬に到れば 霜置^{しもぎ}けども その葉も枯れず 常磐^{とこえ}なす いや栄映^{はな}えに 然れこそ 神の御代より 宜しなへ この橘を 時じくの 香の木の實と 名づけけらしも (万葉集卷十六、四三三、橘の歌一首、大伴宿祢家持) (河) 皇神祖乃可見能大御世爾田道間守常世爾和多利夜保毛知 麻泥行之祭吉 (二部ノミ)
④おきもあぬ我が常世こそ悲しけれ春帰りにし雁も鳴くなり (後拾遺集卷四、秋上、三三、久しくわづらひけるころ雁のなきけるを聞きてよめる 赤染衛門) (河) おきもせぬ、 (孟)
⑤とこよなる鳥の声にぞ岩戸とぢひかりなきよはあけはじめける (日本記寛宴和歌) (河)〔孟〕
52 おりくゝの事おもひいで給ふによくとなかれ給ふ (四三三、12、41)

百年に老舌出でてよよむともわれはいとはじ恋は益すとも
〔万葉集卷四、五、六、大伴宿禰家持の和ふる歌・古今六帖第三、
おむな、三三六、〕「老朽ちひそみなりぬとも我は忘れじ」
〔新〕〔上句ノミ〕

53 すきくしきも人なとがめそときこえたり 〔四六八・43〕

① いでわれを人なとがめそ大舟のゆたのたゆたにもの思ふ頃
ぞ〔古今集卷十二、恋二、五八、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、舟、三三六、〕「物思ふ頃を」〔釈前〕ゆたのたゆる
にものおもふころ、〔釈宮〕もの思ふころそ〔そはミセケ
そ、〕〔釈書〕いでかく我をたゆたに物おもふ、〔紫〕、〔異〕
〔河〕〔休〕物おもふころ、〔細〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕
〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔人〕〔評〕〔集〕

② 翁さび人なとがめそ狩衣けふばかりとぞたづもなくなる
〔後撰集卷十、雑一、二七、同じ日鷹飼にてかりぎぬの袂に
鶴のかたをぬひてかきつけたりける 在原行平朝臣・伊勢
物語、三〇〕〔屋〕

54 いさりせむとおもはざりしはや 〔四六一〇・43〕

思ひきやひなの別れにおとろへて海人のなはたぎいさりせ
むとは〔古今集卷六、雑下、六、隠岐の国に流されて侍
りける時によめる 箕朝臣・古今六帖第四、別、三〇六、た
かむら、〕「あまのなはたき」〔釈前〕〔釈書〕しらすりし 初
包、〔釈宮〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ、〕〔一〕〔第
二句ノミ、〕〔細〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

55 煙のいとちかく時くちくるをこれやあまのしほやくなら
むと 〔四六四・45〕

① 須磨のあまのしほ焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきに
けり〔古今集卷四、五、六、大伴宿禰家持の和ふる歌・古今六帖第三、
勢物語、三六・古今六帖第一、煙、三三六、〕「伊勢のあまの」
同第三、しほ、三三六、〕「伊勢のあまの」〔紫〕〔河〕〔孟〕
〔事〕

② 夕されば野にも山にも立つ煙敷きよりこそ燃えまさりけれ
〔大鏡卷二、六、菅原道真〕〔異〕

56 月いとあかうさしいりてはかなきたびのおまし所おくまでき
まなし 〔四六一四・45〕

天皇の御命かしこみ 柔びにし 家をおき 隠国の泊
瀬の川に 舟浮けて わが行く河の 川限の 八十限おち
ず 万度 かへり見しつ 玉梓の 道行き暮らし あを
によし 奈良の京の 佐保川に 行き至りて わが宿た
る 衣の上ゆ 朝月夜 さやかに見れば 袴の穂に 夜の
霜降り 磐床と 川の水凝り 寒き夜を いこふことなく
通ひつ 作れる家に 千代までに 来ませ大君よ われ
も通はむ 〔万葉集卷一、七、〕〔新〕我宿有衣乃上従朝月夜清

見者袴乃穗爾夜之霜落 〔一部ノミ〕

57 いりがたの月かげにすぐみゆるにたゞこれにしにゆくなり
とひとりごちたまで 〔四六一四・45〕

秋の夜のなもあるものをはかなくもあけしを西に月の行く
らむ 〔未詳〕〔異〕

58 いつとなく大官人のこひしきにさくらかさししけふもきにけり
〔三三・14・49〕

ももしきの大官人はいとまあれや桜かさして今日もくらし
つ〔赤人集、二六三〕、野に遊ぶ・古今六帖第四、かさし、三
三三、「ここにつどへり」・万葉集卷下、二六三、野遊、「梅を
かさしてここにつどへる」・和漢朗詠集卷上、春、春興、
三、赤人〔花〕、〔弄〕〔上句ノミ〕、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕

〔唄〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

59 うちみるよりめづらしうれしきにもひとつなみだぞこぼれ
ける〔三三・4・49〕

嬉しきも憂きも心はひとつにて別れぬものは涙なりけり
〔後撰集卷下、雄三、二六六、物思ひ侍りける頃やんごとなき
高き所よりとはせ給へりければ 読入しらず〕〔紫〕、
〔異〕色わかれぬは涙なりける、〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、

〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔唄〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔対〕
〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

60 そこはかとなくさえづるも心のゆくゑはおなじことなにかと
となと〔三三・14・50〕

世の中はとてまかくても同じこと宮もわらやも果てしなけ
れば〔新古今集卷六、雑下、二五二、題しらず 蟬丸〕

〔弄〕〔休〕〔紹〕〔湖〕〔余〕

61 御ぞどもなどかつけさせ給ふをいけるかひありとおもへり
〔三三・1・50〕

①みさごゐる荒磯波に袖濡れて誰がため拾ふいけるかひぞも

〔古今六帖第五、たのむる、三三三〕〔異〕

②須磨の浦にあさりするあまの大方はかひ有るよとぞ思ふべ
らなる〔兼盛集、二五〇四、須磨〕〔拾〕、〔新〕あさりするあ
まも、〔余〕〔集〕

62 御むまどもちかうたてゝみやりなるくらかなにぞなるいねと
りいでゝかふなどめづらしうみ給ふあすかひすこしうたひて
〔三三・2・50〕

飛鳥井に 宿りはすべし や おけ 蔭もよし 御寝も寒
し 御寐もよし〔催馬楽、飛鳥井、〇〔釈前〕安須加井余
也止利波春戸之世於介毛与之美毛比毛太手之見万久左
毛与之、△釈宮△〔紫〕〔異〕△花△△一△〔細〕〔休〕〔紹〕
△孟△△唄△〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

63 さるべきみやこのつとなどよしあるさまにてあり〔三三・14・50〕

⑤0 を黒崎みつのこ島の人ならば都のつとにいざといはましを
〔古今集卷三下、東歌、二〇五〕〔河〕〔孟〕

64 かくかたじけなき御をくりにとてくろごまたてまつり給〔三三・14・50〕

①よそにありて雲居にみゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒
〔拾遺集卷十四、恋四、九〇、道をまかりてよみ侍りける 人
麿・柿本集、二五八・古今六帖第二、うま、三三六〕〔河〕、
〔休〕こゝに有りてゝ妹が家を、〔紹〕こゝにありて、〔孟〕
〔唄〕

②わが帰るみちの黒駒心あらば君はこずとも己れいなくけ

〔拾遺集卷十四、恋四、六二、題しらず よみ人しらず〕〔河〕、

〔休〕駒はこずとも、〔孟〕〔岷〕〔引〕〔余〕

65 雲ちかくとびかふたづもそらにみよ我ははる日のくもりなき
身ぞ〔四七・51〕

天雲にはねうちつけて飛ぶたづのたつたづしかも君しまさ
ねば〔万葉集卷十一、四六〇〕〔拾〕

66 たづがなき雲井にひとりねをぞなくつばさならべしともを恋
つゝ〔四四・51〕

鶴が鳴き葦辺をさして飛び渡るあなたづたづし独りさ宿れ
ば〔万葉集卷十五、三六六、丹比の大夫〕〔河〕〔上句ノミ〕

ひわたる〔第三句〕、〔二〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔下句ノミ〕、〔新〕

67 かたじけなくなれきこえ侍ていとしもとくやしう思給へらる
ゝ〔四四・51〕

思ふとていとこそ人に馴れざらめしか習ひてぞ見ねば恋し
き〔拾遺集卷十四、恋四、六〇、題しらず よみ人しらず〕

〔釈前〕〔釈宮〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕
〔余〕いとしも人にむつれけん、〔二〕〔上句ノミ〕、いとしも
人にむつれけん、〔紹〕いとしも人にならざらん、〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

68 やをよろづ神もあはれとおもふらむをさせるつみのそれとな
ければ〔四七・52〕

①みそぎして思ふことをぞ祈りつる八百万代の神のまに／＼
〔拾遺集卷五、賀、三三、承平四年中宮の賀し侍りける屏風
に 参議伊衡〕〔異〕〔河〕〔紹〕〔孟〕、〔岷〕祈りける

②問ひ見ばやあまのまし人くさく／＼にをさせる罪はありやな
しやと〔未詳〕〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

69 ひちがさあめとかふりきていとあはたゞしければ〔四七・52〕

①妹が門行き過ぎかねつひち笠の雨もふらなむ雨隠れせむ
〔古今六帖第一、雨、三三六・万葉集卷十一、三六六、妹が門行
き過ぎかねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせむ〕

〔奥〕、〔紫〕〔異〕かさやどりせむ、〔河〕〔孟〕〔岷〕、〔拾〕〔万
葉集ヲ引用〕、〔新〕、〔余〕そをよしにせん、〔評〕

②婦が門 夫が門 行き過ぎかねてや 我行かば 肱笠の
舎りてまからむ 郭公 〔催馬楽、婦が門、四六〇〕〔拾〕〔新〕

〔評〕〔集〕

70 うみのおもてはふすまをはりたらむやうにひかりみちて神な
りひらめく〔四四・53〕

あま小舟帆かも張れると見るまでに頼の浦廻に波立てり見
ゆ〔万葉集卷七、二二・古今六帖第三、舟、三六六、〕ともの
浦わに波立てるみゆ〕〔拾〕ともの浦わにたてる白波、

〔余〕とものうらわに波たてる見ゆ

明石

1 猶これよりふかき山をもとめてやあとたえなましとおぼすに
(四二・4・57)

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし
(古今集卷六、雑下、五五、題しらず 読人しらず)

(拾)(余)

2 身をはふらかしつるにやと心ばそうおぼせど (四八・8・57)

身は捨てつ心をだにもはふらさじ遂にはいかゞなると知る
べく(古今集卷十九、雑体、二六、題しらず 興風・興風集、

二六五五、「なると見るべく」・古今六帖第四、雑の思、三〇〇五

(異)、(五五)つゝめにはなにと

3 二条院よりぞあながちにあやしきすがたにてそをちまいれる

(四二・9・57)

心から花の雪にそぼちつゝうぐひずとのみ鳥の鳴くらむ

(古今集卷十、物名、四三、うぐひす 藤原敏行朝臣・敏行

集、二五五・古今六帖第一、雪、三〇四四 (異)

4 みちかひにてだに人かなにぞとだに御覧じわくべくもあらず

(四二・10・57)

たまばこの道交^{みちま}ゐなりし君なればあとはかもなくなると知らずや(雑物語) (花)(紹)(孟)(屋)(岷)(湖)君なれど、

(一)(第二句)ミ

5 いとどみぎはまさりぬべくかきくらす心ちし給 (四二・1・58)

① 君を惜しむ涙おち添ふこの川の汀まさりて流るべらなり

(貫之集、一五五、兼輔の兵衛のすけ賀茂川のほとりにて左衛門尉みはるのありすけの甲斐へ行くうまのはなむけによめる・古今六帖第四、別、三三三 (孟)(屋)君こふる涙お

ちそひ・思ふべらなり、(引)(余)君こふる涙おちそひ・

思はゆるかな、(大)(評)(集)

② 行く人もとまるも袖の涙川みぎはのみこそ濡れまさりけれ

(土佐日記、二 (新)(余)(全)(事)(大)(評)(集)

6 天地ことほり給へつみなくてつみにあたりつかさ位をとられ

(四三・9・60)

天地の神し理^{ことわり}なくはこそわが思ふ君に逢はず死^しせめ(万

葉集卷四、六〇五 (新)(余)

7 空はすみをすりたるやうに日も暮にけり (四四・3・60)

① すみぞめのたそがれ時の朧夜にありこし君にさやにあひ見

つ (古今六帖第三、初めてあへる、三三三 (拾)(余)

② たゞこゝに君きまさぬかすみぞめのたそがれ時に其の姿み

む (古今六帖第三、近くてあはず、三三三 (拾)(余)

③ 逢ふことの 稀なるいろに おもひそめ わが身は常に

おもへども あふことかたし なにしかも 人をうらみむ

わたつみの 沖をふかめて おもひてし おもひは今は

いたづらに なりぬべら也 ゆくみづの たゆる時なく

かぐなはに おもひ乱れて ふるゆきの けなはけぬべく

おもへども えぶの身なれば なはやまず 思ひは深し

あしびきの やました水の 木がぐれて たぎつ心をた

れにかも あひ語らはむ 色にいでは 人しりぬべみ す
みぞめの 夕べになれば ひとり居て 哀れくゝと 歎き
あまり せむ術なみに 庭にいでゝ たち休らへば しろ
たへの ころもの袖に おくつゆの けなばけぬべく お
もへども なほ歎かれぬ はるがすみ よそにも人に あ
はれとおもへば (古今集卷十九、雑体、短歌、二〇〇、題し
ず 読入しらず・古今六帖第四、長歌、三三三、古き長歌、
読入不知) (新)曇染の夕べになれば (二部ノミ)

8 そこの人のふみとどろかしまだへるに (四四六・60)

天の原ふみとどろかしなる神もおもふ中をばさくるものか
は (古今集卷十四、恋四、三二、題しらず 読入しらず・古今
六帖第一、鳴神、三六三) (湖) (余)

9 なごり猶よせ帰波あらきを柴の戸をしあけてながめをはしま
す (四四九・61)

名児^{なこ}の海の朝明^{あけ}のなごり今日もかも磯の浦^{うら}に乱れてあら
む (万葉集卷七、一五五・古今六帖第三、海、三六〇、「磯の浦
わに」) (拾) (余) いそのうらわに

10 海にます神のたすけにかゝらずはしほのやをあひにさすらへ
なまし (四五二・61)

あら塩のみのつ潮あひに焼くしほのからくも我は老いにけ
るかな (九品和歌、上品下) (異) (河) (孟) (岷) (湖) (引)

(余) しほのやはあひに

11 月のかほのみきらくとして夢の心ちもせず (四六二・62)
目をさめて隙より月を眺むれば面影にのみ君は見えつる

(古今六帖第四、おもかけ、三三三) (拾) (余)
12 又やみえ給ふことさらにね入給へどさらに御めもあはで
(四六三・63)

ねめる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりま
さる哉 (古今集卷十三、恋三、六四、人に逢ひてあしたによ
みて遣はしける 業平朝臣・業平集、二六四・古今六帖第
四、片恋、三六三) (一) (細) (岷) (第二句ノミ、(休) (紹)
(孟) (余)

13 うれしきつり舟をなむかの浦にしづやかにかくろふべき (四六
八・65)

浪にのみぬれつるものを吹く風のたよりうれしきあまの釣
舟 (後撰集卷十七、雑三、三三三、すみ侍りける女四宮づかへ
し侍りけるを友達なりける女同じ車にて貫之が家にまうで
きたりけり貫之がめまらうどにあるじせむとてまかりおり
て侍りける程にかの家を思ひかけて侍りければ忍びて車に
いひいれ侍りける 貫之・古今六帖第五、人づて、三七六・
貫之集、二七五) (釈前) (釈宮) (釈書) (奥) (紫) (異) (河)、
(禿) をひ風の、(一) (休) ぬれぬるものを、(細) (紹)
ぬれぬる袖を、(孟) (屋) ぬれにし物を、(岷) (湖) (引)

14 れいの風いできてとぶやうにあかしにつき給ぬ (四六八・65)

住吉^{いづみぎ}の大倉^{おほくら}向きて 飛ばばこそ 速鳥と云はめ 何か速
鳥 (風土記、播磨国) (花) (孟) 飛ばばこそ、いづれはや
鳥、(休) (紹) 飛ばばこそ、いはれはや鳥、(岷) 飛ばばこ

そはや鳥といはめいづればやとり

15 此世のまうけに秋のたのみをかりをさめ (四二・66)

秋風にあふ頼みこそ悲しけれ我が身むなしくなりぬと思へ

ば (古今集卷五、恋五、八六、題しらず 小町・小町集、

一五八六、みもなき苗のはに文をさして人のものとへやるに)

〔拾〕〔余〕

16 のこりのよはひつむべきいねのくらまちどもなど (四三・66)

秋毎にかりつる稲はつみつれど老にける身ぞ置き所なき

(拾遺集卷七、雑秋、二四、屏風に翁のいね運はするかた

かきて侍りける所に 忠見・忠見集、二五、おきな稲は

こびつみす、「老にける身は」〔河〕、〔休〕〔紹〕つみけれ

ど、〔孟〕、〔岷〕つみぬれど、〔引〕〔拾〕〔余〕

17 空のけしきなごりなくすみわたるあさりするあまどもほこ
らしげなり (四四・68)

あさりするよさのあま人誇るらむ浦風ぬるく霞わたれり

(惠慶法師集、三六、初春) 〔釈前〕をくるらしはまか

せぬるく、〔釈宮〕〔異〕ほこるらし、〔奥〕〔紫〕〔岷〕〔湖〕

ほこるらし浦風ぬるみ、〔河〕ほこるらし浦風ぬるみ霞た

なびく (不本わたれり、真本わたれり、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔引〕〔新〕

〔余〕ほこるらし浦風ぬるみ霞たなびく、〔対〕〔事〕〔大〕

〔集〕

18 たゞなるよりはいひしにたがふとおぼさむも心はづかしう

(四二・7・68)

① ほどふるもおぼつかなくはおもほえず言ひしに違ふとばか

りはしも (未詳) 〔釈前〕おほくえず、〔釈宮〕〔奥〕、〔紫〕

〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔湖〕〔拾〕おぼつかなくも、△弄△〔紹〕

〔屋〕、〔岷〕おぼつかなくも…ことばかりなり、〔余〕〔事〕、

△細△〔引歌に及べからず〕

② いとこそまさりにまされ忘れじといひしにたがふ事のつ

らさも (未詳) 〔異〕

19 たゞめのまへにみやるゝはあはぢしま成けりあはとはるか
になどの給て (四二・70)

① 淡路にてあはと雲居に見し月の近き今宵は所がらかも (古

今六帖第一、雑の月、三三〇、躬恒・躬恒集、二四、十五

夜月) 〔釈前〕〔釈宮〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔二〕〔細〕〔休〕〔紹〕

〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔引〕あはと遥かに、△花△〔岷〕△拾△〔新〕

△余△〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

② あはと見る道だにあるを春霞かすめる方の遥かなる哉 (貫

之集卷四、一五八六) 〔拾〕〔余〕

③ 浜千鳥飛び行くかぎりありければ雲立つ山をあはとこそ見

れ (大和物語、六六・大鏡卷六、四四、読人しらず) 〔玉〕

〔余〕〔大〕

④ 梢のみあはと見えつゝ帚木の本を本より見る人ぞなき (柿

本集、あは、一五五五) 〔玉〕〔余〕〔大〕

20 なにともしくわくまじきこのもかものしはふる人どもゝ
(四三・8・70)

つくばねのこのもかものに蔭はあれど君がみかげにます蔭

はなし〔古今集卷三〕東歌、常陸歌、〔三〕〔事〕

21 入道びわの法師になりて〔四〕〔三・71〕

四の緒に思ふ心を調べつゝひきありけ共知る人もなし〔兼盛集、三三三、びわのはふし〕〔紫〕〔新〕ひきあるけども、

〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕、〔岷〕する人もなし、〔拾〕〔余〕

22 くひなのうちたゝきたるはたが門さしてと哀におぼゆ〔四〕

7・71〕

まだ宵にうち来てたたく水鶏かなたが門さしていれぬなるらむ〔未詳〕〔釈前〕、〔釈宮〕きましてたゝく…たがゝど

さして、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕△弄▽〔細〕〔休〕、〔紹〕きて打

ちたゝく、〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

23 山おしのひがみゝにまつかぜをきゝわたし侍にやあらん〔四〕

14・72〕

①琴の音にみねの松風通ふらし何れのをより調べそめけむ〔拾遺集卷六、雑上、翌一、野宮に斎宮の庚申し侍りけるに松風

入ニ夜琴といふ題をよみ侍りける 斎宮女御・古今六帖第

三、こと、〔三〕〔翌一〕和漢朗詠集卷下、管絃、哭心〔紫〕〔異〕

〔河〕〔孟〕〔岷〕

②松風に耳なれにける山伏は琴を琴とも思はざりけり〔未詳〕

〔花〕、〔弄〕〔上句〕ゝ、〔松風を〕、〔二〕〔細〕、〔休〕〔紹〕

〔屋〕松風を、〔孟〕〔岷〕〔湖〕、〔引〕松風を…わかぬなりけ

り、〔新〕〔余〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

24 伊勢の海ならねどきよなきさにかひやひろはむなどきこそ

よき人にうたはせてわれも時／＼拍手とりて〔四〕〔三・72〕

伊勢の海の 清き渚に しほがひに なのりそや摘まん

貝や拾はむや 玉や拾はむや〔催馬楽、伊勢の海、二〕

〔釈前〕伊勢乃宇美乃支与支ツ名安支左余之保加安比余

名乃利曾也川末安平宇加比也呂波安乎世多末安世比呂波

安乎也、△釈宮▽、〔奥〕伊勢の宇美乃支与支名支左余之保

加比余名乃利曾や川末牟加比や比呂波牟や多末や比呂波

牟、〔紫〕〔異〕〔河〕〔二〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕

〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

25 命のかぎりはせばき衣にもはぐゝみ侍なむ〔四〕〔三・74〕

※衣一袖河

いとけなき衣の袖は狭くともごふの石をばなで尽してむ

〔後拾遺集卷七、賀、翌四、後朱雀院うまれさせ給ひて七夜

によめる 前大納言公任・前大納言公任卿集、三三三、後

朱雀院生れさせ給ひて七夜に〕〔花〕ごふのうへをば、〔休〕

〔紹〕〔孟〕〔岷〕いとけなき…ごふのうへをば

26 ひとりねは君もしりぬやつれぐと思ひあかしのうらさびし

さを〔四〕〔三・75〕

①思ひくれ歎き明石の浜によるみるめ少なくなりぬべらなり

〔古今六帖第三、浜、三三七〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕思ひつゝ、

〔余〕

②身のうさに思ひ明石の浦風にあまの歎きはいつか絶ゆべき

〔元真集、二五〇〕〔余〕

27 されどつらなれ給へらむ人は〔四〕〔三・75〕

うらなれたるや浦の波風は吹かねどさくら波立つ (未詳)

〔釈前〕うらなれやたるやうらのうらのうらかな風は吹かねどさくら波ぞ立つ、〔釈宮〕うらなれたるうらのなみな風は吹かねども、〔釈書〕うらなれたるうらのなみ風吹け、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

23 こまのくるみ色のかみにえならずひきつくろひて (五六13・76)

これをだに形見と思ふを都には葉がへやしつる椎柴の袖

(後拾遺集卷下、哀傷・五三、円融院法皇うせさせ給ひて又の年の御はてのわざなどの頃にやありけむ、うちに侍りける御めのとの藤三位の局にくるみいろの紙に老い法師の手のまねをしてかきてさしいれさせ給ひける 一条院御製)

〔河〕、〔孟〕かたみと思ふ、△岷▽

29 おもふにはとばかりやありけん (四一四・76)

思ふには忍ぶることぞまけにける色には出でじと思ひしものを (古今集卷十一、恋一、五三、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、人に知らるる、三三三) 〔釈前〕、〔釈書〕色にいでし□、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕 (第二句ノミ、一一)

〔細〕、〔休〕あふにしかへばさもあらばあれ、〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

30 たもにつゝみあまりぬるにやさらにみたまへもをよび侍らぬ (四九五・77)

①うれしさを昔は袖につつまけりこよひは身にもあまりぬるかな (和漢朗詠集卷下、慶賀、七三、新勅撰集卷七、賀、四)

六、題しらず 読人しらず) 〔釈前〕、〔釈宮〕〔奥〕〔異〕う

れしさは、〔紫〕〔河〕、〔弄〕 (第二句ノミ、)「なにゝつゝまむ」、〔休〕袖につゝみにき、〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔余〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

②嬉しきを何につゝまむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを

(古今集卷七、雑上、△空、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、ころも、三三三) 〔河〕〔岷〕うれしさを、(一) 第二句ノミ、〔細〕〔新〕(上句ノミ、)「うれしさを」、〔孟〕〔大〕

31 なべてならぬたまもなかづけたり (四九九・77)

①伊勢の海に年経て住みし蟹なれどかかるみるめは潜かざりしを (後撰集卷六、雑四、三三三) 亭子院にさぶらひけるに御ときとおろしたまはせたりければ 伊勢・伊勢集、二二三、一「かづかざりしに」・古今六帖第三、藻、三三七、伊勢、「あまなればいづれの藻かはかづき残せる」〔河〕〔孟〕〔岷〕

②何せむにへだのみるめを思ひけむ沖つ玉もを潜く身にして (後撰集卷十、雑一、二〇〇、志賀の唐崎にてはらへしける人のしもつかへにみるといふ侍りけり、大伴黒主そこにまできてかのみるに心をつけていひ戯おれけり、はらへはてゝ車より黒主に物かつける其裳のこしにかきつけてみるに送り侍りける 黒主・古今六帖第三、裳、三三三) △異▽、

〔花〕(一)〔細〕(下句ノミ、)「おきの玉もを」、〔弄〕〔休〕〔紹〕〔孟〕、〔岷〕いそのみるめを、〔湖〕(下句ノミ、)〔引〕〔余〕〔事〕

③逢ふまでの形見とてこそ留めけむ涙に浮ぶ藻屑なりけり (古今集卷十、恋四、七四、親の守りける人のむすめにいと

忍びにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひけれ
は急ぎかへるとて裳をなむぬぎ置きて入りにける、其後裳
を返すとてよめる 興風・興風集、一六〇、親のまもりける
むすめをいと忍びてあひて物いひける程に親のあふといひ
ければ急ぎていりにけるそのも返すとて、「留めけめ」・古
今六帖第、かたみ、三三三、よしありの大臣、「留めけめ」
〔細〕〔湖〕〔下句ノミ〕、〔余〕

32 御つかひになべてならぬたまもなどかつけたり〔三九・
77〕

あみの浦に船乗りすらむをとめらが珠裳の裾に潮満つらむ
か〔万葉集卷一〕、三、柿本朝臣人麿・拾遺集卷六、雑上、
三三、伊勢の御幸にまかりとまりて 人麿、「をふの海に：
我妹子が」〔拾〕

33 いふせくもころにものをなやむかなやよいかにとふ人
もなみ〔三九・77〕

やよやまで山時鳥ことつてむわれ世の中にすみわびぬとよ
〔古今集卷三、夏、一三、題しらず みくにのまち〕〔河〕

〔孟〕〔岷〕〔上句ノミ〕

34 いふせくもころにものをなやむかなやよいかにとふ人
もなみ いひがたみと〔三九・77〕

① 恋しともまだ見ぬ人のいひ難み心にももの歎かしきかな

〔未詳〕〔弄〕〔一〕〔細〕、〔休〕まだ見ぬ人は、〔孟〕〔湖〕、

〔引〕なやましき哉〔結句〕、〔拾〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕

〔大〕〔評〕〔集〕

② かずかずと思ひ思はずとひがたみ身をする雨は降りぞまさ

れる〔古今集卷六、恋四、七三、藤原敏行朝臣の業平朝臣の
家なりける女をあひ知りて文遣はせりける言葉に、今まう
でく雨の降りけるをなむみ煩ひ侍るといへりけるを聞きて
かの女にかはりてよめりける 在原業平朝臣・古今六帖第
一、雨、三三三、業平・業平集、二六三〕〔屋〕

35 おもふらんころのほどやよいかにまだみぬ人のきゝかな
やまむ〔四〇・3・78〕

恋しともまだみぬ人のいひがたみ心にもものゝなげかしきか
な〔未詳〕〔花〕〔孟〕〔岷〕

36 いかにせましとたはぶれにくゝもあるかな〔四〇・13・78〕

ありぬやと試みがてら逢ひ見ねば戯れにくきまでぞ恋しき
〔古今集卷六、雑体、誹諧、二五、題しらず 読人しらず〕

〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕〔第三句ノミ〕、〔細〕〔休〕〔紹〕

〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕

〔集〕

37 十三日の月の花やかさにさしいでたるにたゞあたら夜るとき
こえたり〔四〇・10・81〕

あたら夜の月と花とを同じくは心しれらむ人に見せばや

〔後撰集卷三、春下、二〇三、月の面白かりける夜花を見て

源信明・信明集、三三三、いきたるにあはねば、「哀れしれ

らむ」〔秋前〕〔釈書〕〔奥〕〔異〕あはれしれらん、〔釈宮〕

あはれしれらんにみせはや本

心もはれてみるよしもがな、〔河〕あはれしれらん（心も
はれてみるよしもがな伊行尺）、〔弄〕〔第四句ノミ〕、〔一〕

〔下句ノミ、〕「哀しれらん」、〔細〕〔下句ノミ、〕〔休〕〔紹〕〔孟〕
〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔孟〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
38 おもふどこちみまほしき入江の月影にもまつこひしき人の御事
を〔集〕13・82

思ふどちいざ見に行かむたまつ島いり江の底にしつむ月か
げ〔未詳〕〔釈前〕入江のうみに、〔釈宮〕入えのにこに、
〔釈書〕のいざゆきてみん…うつる月かけ、〔奥〕〔紫〕〔異〕
〔河〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕、〔余〕
〔上句ノミ、〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

39 秋のよの月げのこまよわがこふる雲ゐをかけれときのまもみ
ん〔集〕2・82

① ひさかたの月毛の駒をうち早め来ぬらむとのみ君を待つか
な〔古今六帖第三、うま、三三六〕〔奥〕、〔紫〕うちはやみ、

〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕、〔余〕〔第二句
ノミ、〕〔事〕〔集〕

② 青駒の足掻^{あか}を早み雲居にそ妹があたりを過ぎて来にける
〔万葉集卷三、三三六〕〔拾〕〔余〕

③ 遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒〔万
葉集卷七、三三〕、行路・拾遺集卷四、恋四、九〇、道をまかり
てよみ侍りける 人麿、「よそにありて」〔拾〕〔新〕〔余〕

④ 赤駒の足掻速けば雲居にも隠り往かむぞ袖巻け吾妹〔万葉
集卷十一、三三〇〕〔拾〕我駒のあがき早くは…かくれゆかん
ぞ、〔余〕

⑤ まな鶴の茸毛の駒やながぬしの我が門過ぎば歩き留まれ

〔古今六帖第三、とゞまらず、三三六〕〔拾〕〔余〕
40 いはにおひたる松の根ざしも心ばへある。さまなり〔集〕6・
82

① 磯^{いそ}の上に生ふる小松の名を惜しみ人に知らえず恋ひ渡るか
も〔或る本の歌に曰はく、いはの上に立てる小松の名を惜
しみ人はいはらず恋ひ渡るかも、万葉集卷七、三三六〕

〔拾〕いはの上に…人にしられず、〔余〕人にしられず

② 種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひばあはざらめ
やは〔古今集卷十一、恋一、五三、題しらず 読人しらず・古
今六帖第三、いひはじむ、三三六〕、「生ひぬるを」〔拾〕あ
はざらめやも、〔余〕

41 月いれたるま木の戸ぐちけしきばかりをしあけたり〔集〕8・
82

横の戸をやすらひにこそささざらめいかに明けぬる秋の夜
ならむ〔未詳〕〔奥〕いかにあくる、〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕
〔紹〕〔孟〕、〔引〕やすらひにまきの戸こそは…冬の夜なら
ん、〔事〕

42 むつごとをかりあはせむ人もがなうき世の夢もなばさむ
やと〔集〕4・83

今更にむつごとへのねに引きかかり苔の山路を忘れやはせむ
〔古今六帖第三、法師、三三七〕〔河〕〔孟〕忘れやらなん、
〔岷〕

43 あけぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきてかたら
む〔集〕5・83

①むば玉の闇のうつつは定かなる夢にいくらもまさらざりけり(古今集卷三、恋三、四、題しらず 読人しらず・古今六帖第四、片恋、三六六)〔新〕

②君やこし我やゆきけむ思ほえず夢か現かねてかきめてか(古今集卷三、恋三、四、業平朝臣の伊勢国に罷りたりける時斎宮なりける人にいとみそかに逢ひてまたのあしたに人やるすべなくて思ひをりける間に女のもとよりおこせたりける 読人しらず・伊勢物語、二四・古今六帖第四、片恋、三六六、斎宮)〔新〕

③かきくらす心の闇にまどひにきゆめ現とは世人さだめよ(古今集卷三、恋三、四、かへし 業平朝臣・伊勢物語、一四・古今六帖第四、片恋、三六六、業平)〔新〕

44 つねはいとはしき夜のながさもとく明ぬる心ちすれば(四三・83)

①ながしとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば(古今集卷三、恋三、四、題しらず 凡河内躬恒・古今六帖第五、ふせり、三五七、みつね・小町集、九六六、かへし)〔花〕、〔細〕、〔岷〕、〔下句ノミ〕、〔休〕、〔紹〕、〔孟〕、〔湖〕、〔余〕、〔対〕、〔事〕

②今夜の早く明けなばすべを無み秋の百夜を願ひつるかも(万葉集卷四、四、反歌、笠朝臣金村・古今六帖第三、曉におく、三五八、「今宵のや早く明くれば」願ひつるかな)〔拾〕〔余〕此よらの早く明れば

45 をのづから物いひさがなきあまのこもやたちまじらんと(四六

こゝにしも何句ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に(拾遺集卷七、雑秋、二〇六、房の前裁見に女どもまうで来りければ 僧正遍昭・遍昭集、二六六、嵯峨に侍りし法師の坊の前に前裁のはべりけるを女どものたちとまりて見侍りしかば)〔弄〕、〔休〕、〔岷〕、〔下句ノミ〕、「私引歌に不及歎」46 ちかひしこともなどかきてなにごとにつけても(四六・84)

①忘れじと誓ひしことをあやまたばみかさの山の神もことはれ(未詳)〔釈書〕、〔奥〕あやまたず、〔紫〕異、〔河〕細)〔休〕、〔紹〕、〔孟〕、〔屋〕、〔岷〕、〔湖〕、〔引〕、〔拾〕、〔余〕、〔全〕、〔対〕、〔事〕、〔大〕、〔評〕、〔集〕、ハ一〇(引歌までもなきにや)

②思はぬを思ふといはば大野なる三笠の社の神し知らさむ(万葉集卷四、四、大宰大監大伴宿禰百代・古今六帖第五、ちかふ、三五九、「神思ひ知れ」)〔拾〕〔余〕

③逢ふ事も頼むる事もあやまたば世にふる事もあらじとぞ思ふ(伊勢集、一三七、枇杷の大臣ちかごとなどたてし折に)〔拾〕〔新〕〔余〕

47 うらなくも思ひけるかなちぎりしを松より波はこえじ物ぞと(四七・85)

①君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波もこえなむ(古今集卷三、大歌所御歌、二〇三、東歌、陸奥歌)〔花〕、〔第四句ノミ〕、ハ休〱孟〱、〔岷〕、〔湖〕、〔下句ノミ〕、〔新〕、〔余〕、〔上句ノミ〕、〔全〕、〔対〕、〔事〕、〔大〕、〔評〕、〔集〕

②浦ちかくふりくる雪は白波のすゑの松山とすかとぞ見る

(古今集卷六、冬、三六、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌
藤原興風・興風集、二六三・古今六帖第一、雪、三五四・寛

平御時后官歌合、三四九、興風) (五、(唄)第二句ノミ)

③つるばみの一重衣のうらもなくあるらむ兄ゆゑ恋ひ渡るかも
(万葉集卷三、二六六) (拾)

④うらもなく去にし君ゆゑ朝な朝なもとぞ恋ふる逢ふとは
無けど(万葉集卷三、三六、別を悲める歌) (拾) あふと
はなしと

⑤鳥が音の 聞ゆる海に 高山を 障になし 沖つ藻を 枕

になし ひむし羽の 衣だに著すに 鯨魚取り 海の浜べ
に うらもなく 寝ねたる人は 母父に 愛子にかあらむ

若草の 妻かありけむ 思ほしき 言伝てむやと 家問へ
ば 家をも告らず 名を問へど 名だにも告らず 泣く児

なす 言だに語はず 思へども 悲しきものは 世間にあ
り 世間にあり(万葉集卷三、三三三) (拾) 鯨魚取り海の

はまべにうらもなくやどれる人は(二部ノミ)

⑥うらもなくわが行く道に青柳の萌りて立てればもの思ひ出
づも(万葉集卷十四、三四四) (拾)(新)物思ひつゝも

⑦伊波保ろの傍の若松かきりとや君が来まさぬうらもとなく
も(万葉集卷十四、三四五) (拾)

⑧秋風に今か今かと紐解きてうち待ち居るに月かたぶきぬ
(万葉集卷三、四二二) (拾)

48 いまぞまことに身もなげつべき心ちする(四七五・85)

同じくは君とならびの池にこそ身を投げつとも人に聞せめ
(後撰集卷三、恋四、八六、まだあはず侍りける女の許にし

ぬべしといへりければ返事に早や死ねかしといへりければ
又遣はしける 読人しらず 古今六帖第三、池、三三四、

「人に語らむ」(紫)(異)身もなげつとも人にきかれめ、

(河)(五)(唄)人にきかれめ、(引)(余)人はいはれめ

49 みむ人の心にしみぬべき物のさまなりいかでか空にかよふ御
心ならむ(四七三・86)

雲居にも通ふ心のおくれなば別ると人に見ゆばかりなり
(古今集卷六、離別、三六、相知りて侍りける人のあづまの

方へまかりけるを送るとよめる 深養父) (集)

50 塩やく煙かすかにたなびきてとりあつめたる所のさまなり
このたびはたちわかるとももしはやくけふりはおなじかたに

なびかむ(四七三・88)

須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけ
り(古今集卷十四、恋四、六六、題しらず 読人しらず・伊勢

物語、二八・古今六帖第一、煙、三六六・同第三、しば、三三三
セ「伊勢のあまの」(事)

51 心ことなるしらべをほのかにかきならし給へる(四七二・89)

短か夜のふけゆくまゝに高砂のみねの松風ふくかとぞきく
(後撰集卷四、夏、二六、夏の夜深養父が琴ひくを聞きて

藤原兼輔朝臣) (拾)

52 されどたゞわかれむ程のわりなさをおもひむせたるもいとこ
とはりなり(四七二・90)

しろたへの袖別るべき目を近み心にむせびねのみし泣かゆ
〔万葉集卷四、四三、紀女郎・古今六帖第四、別、三三三、〕「心
にむせて泣きのみぞなく」・玉葉集卷六、旅、二〇七、題しらす
紀女郎、「泣きのみぞ泣く」〔拾余〕
53 まことの都のつとにしつべき御をくり物ともゆへづきて〔四三
14・91〕

を黒崎みつのこ島の人ならば都のつとにいざといはましを
〔古今集卷三、東歌、陸奥歌、一〇六〇〕〔集〕
54 心のやみはいとゞまとひぬべく〔四三11・92〕

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
〔後撰集卷十、雑、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひの
かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞ
めてまらうどあるじ酒あまたゞびの後酔にのりて子供のう
へなど申しけるついでに 兼朝朝臣・古今六帖第三三三三、
〕「迷ひぬるかな」・大和物語、五二・兼輔集、一六六、子の悲し
きことを集りて云ひければ、中納言 〔釈書〕〔紫〕〔異〕〔河〕
△細▽〔孟〕〔屋〕〔引〕〔余〕〔事〕〔評〕〔集〕

55 わざとならず身をば思はずとはのめかし給ぞ〔四三14・94〕
忘らるる身をは思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな
〔拾遺集卷十四、恋四、六五、題しらす 右近・古今六帖第五、
ちかふ、三三三・大和物語、五二〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕
〔河〕、〔一〕〔二〕句ノミ、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕
〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

56 かつみるにだにあかぬ御さまをいかでへだてつる年月ぞと
〔四三1・94〕

陸奥のあさかの沼の花がつみかつ見る人に恋ひやわたらむ
〔古今集卷十四、恋四、六七、題しらす 読人しらす・古今六
帖第六、はながつみ、三六六〕〔集〕かつ見る人の

57 わたつ海にしなへうらぶれひるのこのあしたゞざりし年はへ
にけり〔四三14・95〕

① かぞいろはいかにあはれと思ふらむみとせになりぬ足たゝ
ずして〔和漢朗詠集卷下、詠史、六五、日本紀寛宴和歌集、
大江朝綱、「あはれと見ずや蛭の子は」〕〔紫〕、〔異〕いか
ゞあはれと、〔河〕△花▽△一▽細▽〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕
〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

② わたつみのしづみ浦さびひるのが足たゞざりしほどは来
にけり〔未詳〕〔異〕

③ 君に恋ひしなえうらぶれわが居れば秋風吹きて月かたぶき
ぬ〔万葉集卷十、三元〕〔河〕〔岷〕〔拾〕〔第二句ノミ、〕君こ
ふと〕

④ 時ごとに いや珍らしく 八千種に 草木花咲き 鳴く鳥
の 声も変らふ 耳に聞き 眼に見るごとに うち歎き
萎えうらぶれ しのひつつ ありける間に 木の晩の 四
月し立てば 夜隠りに 鳴く 霍公鳥 古ゆ 語り継ぎつる
鶯の 現し 真子かも 菖蒲 花橘を 少女らが 珠貫くま
でに 茜さす 昼はしめらに あしひきの 八峰飛び越え
ぬばたまの 夜はすがらに 暁の 月に向ひて 行き還

り 鳴き響むれど いかに飽き足らむ〔万葉集卷六、四六六〕

〔河〕うちなげきしなへうらぶれしのびつゝ〔二部ノミ〕

⑤秋萩にうらびれをれば足引の山したとよみ鹿の鳴くらむ

〔古今集卷四、秋上、三六、題しらず 読入しらず〕〔河〕

〔孟〕〔岷〕〔第二句ノミ〕、「うらぶれをれば」

58 かのおかしにはかへる浪に御文つかはす〔四七、九六〕

すまの浦をけふ過ぎ行けどこし方へ帰る波にやことをつて

まし〔後拾遺集卷六、羈旅、三三、筑紫へ下りける道にて須磨の浦にてよみ侍りける 大中臣能宣朝臣〕〔異〕〔河〕、

〔岷〕〔私引歌におよばず〕、〔余〕

59 波のよるゝいかに〔四七、九六〕

あま小舟われに思ひをつけてしを波のよるゝまつと思はん〔未詳〕〔異〕海人舟の我に思ひは…までとをとせぬ、

〔花〕〔休〕〔孟〕、〔岷〕〔此歌不及引〕、〔余〕

60 なげきつゝあかしの浦にあさ霧のたつやと人と思ひやるかな〔四七、九六〕

〔四七、九六〕

①ほのぼのと明石の浦の朝きりに島がくれ行く舟をしぞ思ふ

〔古今集卷六、羈旅、四六、題しらず 読入しらず・古今六帖第三、舟、三六三、人麿・柿本集、二五五、和漢朗詠集卷

下、行旅、四七、〕〔花〕、〔二〕〔下句ノミ〕「引歌にあら

ず」、〔細〕〔岷〕〔上句ノミ〕、〔紹〕、〔新〕〔初句ノミ〕、〔対〕

〔事〕〔大〕

②君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち歎げく息としらませ

〔万葉集卷五、三三〕〔紹〕浜べの宿に…いきとしらなん、

〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕浜べの宿に、〔大〕〔集〕

③わが故に妹歎くらし風早の浦の沖辺に霧たなびけり〔万葉集卷五、三三〕〔拾〕〔新〕〔余〕

〔万葉集卷五、三三〕〔拾〕〔新〕〔余〕

④沖つ風いたく吹きせば吾妹子が歎きの霧に飽かましものを

〔万葉集卷五、三三〕〔拾〕〔新〕〔余〕

⑤大野山霧立ち渡るわが歎くおきその風に霧立たちわたる

〔万葉集卷五、三三〕〔拾〕〔大〕〔集〕

61 帰りてはかごとやせましよせたりしなごりに袖のひがたかりしを〔四八、九六〕

〔四八、九六〕

いたづらに立ちかへりにし白波のなごりに袖のひる時もなし〔後撰集卷五、恋四、六三、大輔が許にまうできたりける

に侍らざりければ帰りて又のあしたに遣はしける 朝忠朝臣・素性法師集、二五三、〕「名残の袖のひる時ぞなき」、朝

忠集、一九五、〕物言はで返し、「名残の袖の」〔異〕たち返

りこし…ひる時ぞなき、〔花〕〔二〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕

〔新〕〔余〕〔事〕〔集〕

澤 標

- 1 わが名をばさらにもいはず人の御ためさへなどおほしいづる
いにとうき御身なり (四六12・103)
わが身からうき世の中となげきつゝ人のためさへ悲しかる
らむ (古今集卷六、雑下、九六〇、題しらず 読人しらず)
〔拾〕〔余〕〔事〕
- 2 いつしかも袖うちかけむおとめごが世をへてなづるいはのお
ひさき (四六12・109)
君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬ岩はならなむ
〔拾遺集卷五、賀、三九六、題しらず 読人しらず・是則集、
一六五三、祝、苔、巖・天徳四年内裏歌合、三三三三〕〔一〕第
四句ノミ、〔岷〕〔湖〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
- 3 ひとりしてなづるは袖のほどなきにおほふばかりのかげをし
ぞまつ (四六19・110)
大空におほふばかりの袖もがな春さくはなを風にまかせじ
〔後撰集卷三、春中、四〇、題しらず 読人しらず・寛平御時
后宮歌合、三三三〇〕〔岷〕〔上句ノミ〕、「此歌を引には及ばず
歎」、〔湖〕〔上句ノミ〕、〔余〕風にまかせで、〔評〕〔集〕
- 4 いとよくうちあみてそよたがならはしにかあらむ (四六三三・
110)
いつはりをたれならはして限りなき我がまことをもつたが
はすらむ (信明集、三〇〇、又おとこ) 〔余〕
- 5 我はわれとうちそむきながめて (四六13・111)
うつつにてたれ契りけむ定めなき夢路にまよふ我はわれか
は (後撰集卷五、恋三、七三、かへし 読人しらず) 〔余〕
〔全〕〔対〕〔事〕
- 6 あはれなりしよの有さまなどひとりごとのやうにうちなげき
て (四六14・111)
あはれともいふべき人はおもほえて身のいたづらになりぬ
べきかな (拾遺集卷五、恋五、九六〇、物いひ侍りける女の後
につれなく侍りて更にあはず侍りければ 一条摂政) 〔休〕
〔紹〕、〔岷〕〔私此歌不及引歎〕
- 7 おもふどちなびくかたにはあらずともわれぞけぶりにさきだ
ちなまし (四六11・111)
須磨の海人のしほ焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきに
けり (古今集卷五、恋四、七六、題しらず 読人しらず・伊
勢物語、三六・古今六帖第二、煙、三三六・同第三、しほ、三
三七、「伊勢のあまの」) 〔事〕
- 8 いのちこそかなひがたかべいのなめり (四六14・112)
命だに心になかなふ物ならば何かは人を忘れしもせん (古今
集卷六、離別、三六、源のさねがつくしへ湯あみむとて罷り
ける時に山崎にて別れ惜みける所にてよめる しろめ・古
今六帖第四、別、三三〇七、「何か別れの悲しかるべき」・大和
物語、六五・和漢朗詠集卷下、銭別、六四〇) 〔弄〕何か別れ
の悲しかるべき、〔休〕〔紹〕〔引〕何か別れの悲しからま
し、〔評〕〔集〕

9 うみ松やときぞともなきかげにゐてなにあやめもいかにわくらむ (四四三・113)

おぼつかない今日は子の日か蟹ならば海松をしぞ引くべかりける (古今六帖第一、子日、三三六、貫之・土佐日記、三、

「引かましものを」 (河) (孟) (岷) (引) (余) うみ松をこそ引くべかりけれ、(休) (紹) けふの子の日に…うみ松をこそ引くべかりけれ

10 この御つかひなくはやみの夜にてこそくれぬべかりけれ (四四三・113)

みる人もなくて散りぬる奥山の紅葉はよるの錦なりけり (古今集卷五、秋下、三三六、北山に紅葉折らむとてまかりける時によめる 貫之・古今六帖第六、紅葉、三三六・和漢朗詠集卷上、秋、落葉、三三六) (対) (大) (集)

11 いはほの中たづぬるがおちとまれるなどこそあれ (四四四・113)

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえござらむ (古今集卷六、雑下、三三六、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、いはほ、三三六、「住まへばか…尋ね来ざらむ」) (紫) (異) (休) (引) (余) (事) (評) (集)

12 うらよりをちにこぐ船のとしのびやかにひとりごちながめ給ふ (四四五・114)

みくま野の浦よりをちにこぐ舟のわれをばよに隔てつるかな (古今六帖第三、うら、三三六、伊勢・伊勢集、一八四四) (釈前) われをやよそに、(釈書) (奥) (紫) (異)、(河) へだ

てけるかな (不本つるかな、けるイ傍書、其本つる哉、(一) (休)

(孟) へだてぬるかな、(細) (紹) (屋) (岷) (湖) (引) (新) (余) (全) (対) (事) (大) (評) (集)

13 こりすまにたちかへり御心ばへもあれと (四四七・116)

① こりすまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にしすまへば (古今集卷三、恋三、三三、題しらず 読人しらず)

(岷) (湖) またもあだ名は、(引) (余) (事) (評) (集)

② 白波は立ち騒ぐともこりすまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ (古今六帖第三、みるめ、三三六・新古今集卷五、恋五、一四三、題しらず 読人しらず) (余)

14 うきものはよなりけりとおほしなげく (四四八・117)

かつまだの池にたちにし昔より世はうき物と思ひ知りにき (未詳) (余)

15 神もみいれかずまへ給ふべきにもあらず (四四八・120)

手向にはつりの袖もきるべきに紅葉に飽ける神や返さむ (古今集卷六、羈旅、四三、朱雀院の奈良におはしましける時に手向山にてよめる 素性法師・素性法師集、一三三、朱雀院の御ともに仕うまつりて手向の山にて、「着るべきを」) (弄) (全) (句) (ノミ)、(一) (細) (休) (紹) (孟) (岷) (余)

16 ほりえのわたりを御らむじて (四四九・121)

① ほり江には玉敷かましを大きみのみふね漕がむとかねてしりせば (古今六帖拾遺、三三六、井手左大臣・万葉集卷六、四四六、左大臣橘宿禰、「大君を」) (河) (休) (孟) (岷) (湖) (新) ② 津の国の長らへゆかば忘れられで猶もみまくの堀江なるらん

〔古今六帖第三、江、三三〇、貫之〕〔河〕又もみまくの、

〔孟〕忘れなで、〔岷〕忘れなで又もみまくの

17 いまはたおなじなにはなると御ところにもあらでうちずし給へるを〔三〇七・121〕

佗びぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ〔後撰集卷五、恋三、九二〕、事いで来て後に京極の御息所につかはしける 元良親王・拾遺集卷五、恋三、六六、題しらず もとよしのみこ・古今六帖第三、みをつくし、三三三、もとよしのみこ・元良親王集、三三〇、こといできて後京極の御息所に 〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、

〔一〕下句ノミ、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

18 たみのゝしまにみそぎつかうまつる御はらへのものにつけてたてまつる日暮がたになり行ゆふしほみちきて入江のたづもこゑおしまぬほどのあはれなる〔三三二・122〕

① なのは渦しほ満ちくらしあま衣田蓑の島にたづなき渡る〔古今集卷五、雑上、九三、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、島、三三三〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

② 難波渦 潮満ちくれば 海人衣 海人衣 田蓑の島に 鶴立ちわたる 〔神楽歌、難波渦、三三〕〔集〕

19 露けさのむかしににたるたびごろもたみのゝしまのなにはかくれず〔三〇六・122〕

雨により田蓑の島を今日行けば名には隠れぬものにぞあり

ける〔古今集卷五、雑上、九六、難波へまかりける時たみのゝ島にて雨にあひてよめる 貫之・拾遺集卷六、別、三三三、

たみのゝ島のはとりにて雨にあひて 貫之、〔田蓑の島に分け行けど〕・古今六帖第一、雨、三三三、貫之・同第三、島、三三七、貫之・貫之集、一六〇三、難波の田蓑の島にて雨にあひて、〔雨にきる…きてみれば…我が身なりけり〕〔紫〕

〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初ノミ〕、〔一〕、〔休〕たみのゝ島にきてみれば、〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

20 いさやまたしまこきはなれな空に心ほそきことやあらむと〔三〇二・122〕

① 今はとて島漕ぎ離れ行く船にひれふる袖を見るぞ悲しき〔落窪物語、四四〕〔河〕、〔花〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕行く舟も、〔弄〕〔第二ノミ〕、〔一〕〔引歌心不叶歟、〔休〕〔屋〕〔全〕〔集〕

② なのはゝと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ〔古今集卷六、羈旅、四六、題しらず 読人しらず・柿本集、三三三・古今六帖第三、舟、三三三、人麿・和漢朗詠集卷下、行旅、四七〕〔細〕〔下ノミ〕、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔第二ノミ〕、〔評〕〔集〕

21 六条のふる宮をいとよくすりしつろひたりければみやびかにすみ給けり〔三〇四・123〕

昔こそ難波田舎と言はれけめ今は京引き都びにけり〔万葉集卷三、三三、式部卿藤原宇合卿〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕なにはこそ昔田舎と…いまはみやびとそなはりにけり、〔岷〕
22 うき身をつみ侍にも女はおもひの外にて〔三〇五・125〕

世の中は

3 まちうけ給ふたもとのせばきにおほ空のはしのひかりを(五元
11・137)

①うれしきを何につまむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを
(古今集卷十七、雑上、八五、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、ころも、四三三) (拾)(余)

②うれしさを昔は袖に包みけり今夜は身にもあまりぬるかな
(新勅撰集卷七、賀、四六、題しらず 読人しらず・和漢朗
詠集卷下、慶賀、七三) (拾)(余)

4 かゝるよのさはぎいできてなべてのようくをばしみだれしま
ぎに(五元12・137)

①あすか川我が身一つの淵瀬ゆへなべての世をもうらみつる
かな(後撰集卷七、雑三、三三、題しらず 読人しらず)
(余)

②大方のわが身一つの憂きからなべての世をも恨みつるか
な(後撰集卷七、雑三、三三、題しらず 読人しらず・拾
遺集卷五、恋五、九三、題しらず 貫之) (余)

5 ふりはへてしもえたづねきこえ給はず(五元14・138)

ふりはへていざ故郷の花見むとこしを匂ひぞ移ろひにける
(古今集卷十、物名、四一、しをに 読人しらず・古今六帖
第六、しをに、四四六) (異)

6 むぐらにはにしむがしのみかどをとちこめたるぞたのもしけ
れど(五元5・140)

今更にとふべき人も思はず八重葎してかどさせりてへ

(古今集卷六、雑下、九三、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、くれどあはず、三六六) (河)(孟)(眠)(湖)(新) (下
句ノミ、)(余)(集)

7 ぬす人などいふひたぶる心あるものも思やりのさびしければ
にや(五元10・141)

みよし野のたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴く
なる(伊勢物語、元・古今六帖第六、かり、三三三) (異)

8 かくいみじきのらやぶなれども(五元12・141)

里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる
(古今集卷四、秋上、二四六、仁和の帝みこにおはしましける
ときふるの滝御覽せむとおはしましける道に遍昭が母の
家に宿り給へりける時に庭を秋の野につくりておほむ物語
のついでによりて奉りける 僧正遍昭・遍昭集、一八四・
古今六帖第三、やど、三三七、僧正遍昭) (河)(休)(孟)(眠)

9 ふりにたるみづしあげてからもりはこやのとじかぐやひめの
ものがたりのゑに(五元6・141)

①八重とづる道は夢にもまどふらしぬるたまにだに逢ふと見
えねば(伊勢集、二四四、かねもりが、道尋ね佐びてふせ
る男) (拾)(詞書「からもりが道たづねわびてふせるをと
こ」とする、)(余)

②からもりが宿を見んとて玉鉾にめをつけんこそかたは人な
れ(うつは物語、楼上下) (拾)(余)

10 いまはかぎりなりけりとしごろあらぬさまなる御さまをかな

しう(三三13・144)

憂きながらさすがに物の悲しきは今は限りと思ふなりけり
(元輔集、一五三三、時々まかる女にこと人まかると聞きて・
清慎公集、三三三三、もとすけ人知れぬことありて女を恨み
て・詞花集卷へ、恋下、二五、かよひける女のこと人に物い
ふときうていひ遣はしける 清原元輔)〔余〕

11 もえいづるはるにあひ給はなむとねじわたりつれど(三三
14・144)

岩そそぐ垂水の上の早蕨の萌え出づる春になりけるかな
(万葉集卷へ、一四八、志貴皇子、「たるみの上の…なりけ
るかも」・和漢朗詠集卷上、春、早春、二五)〔釈前〕、〔奥〕

〔紫〕(休)たるみのうへの…あひにける哉、〔異〕、〔河〕
〔紹〕(孟)あひにける哉、〔眠〕(私此引歌如何)、〔湖〕(引)
〔拾〕、〔新〕岩はしるたるみのうへの、〔余〕(第二句ノミ、
〔事〕(大)〔評〕(集))

12 たびしかはらなどまでよろこびおもふなる(三三1・144)

みがくらむ玉の光を頼む哉かずにもあらぬたてし瓦を(元
輔集、一五三三、筑紫にてたかわのみかどにはひたすたてま
つりあげらるゝに)〔拾〕たびしかはらを、〔新〕

13 かなしかりしおりのうれしさはたゞわが身ひとつのためにな
れるとおぼえしが(三三2・144)

世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれ
るか(古今集卷六、雑下、五六、題しらず 読人しらず)

〔釈前〕(奥)〔紫〕(異)〔河〕、〔弄〕(第二句ノミ)、〔細〕(一一)、

〔休〕世の中の、〔紹〕(孟)〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔大〕〔集〕

14 おぼえしかひなきよかなと心くだけてつらくかなしければ
(三三3・144)

①ひとたびも恋しと思ふに苦しきは心ちぞちぐにくだくべら
なる(新撰万葉集卷下、思歌、二)〔余〕

②君恋ふる心はそれにくだくるをなど数ならぬ我が身なるら
む(曾丹集、三四五・続古今集卷三、恋五、三四七)〔余〕

15 よのうきときはみえぬ山ちをこそはたづめなれ(三三8・
144)

①み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時の隠れがにせむ
(古今集卷六、雑下、五五、題しらず 読人しらず)〔釈
前〕かくがにせん、〔奥〕(紫)〔異〕〔河〕(八弄)〔休〕〔紹〕〔孟〕

〔眠〕〔湖〕〔余〕〔全〕〔大〕

②世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり
けれ(古今集卷六、雑下、五五、おなじ文字なき歌 物部
よしな)〔紫〕、〔異〕見えぬ山路に、〔河〕、(一一)〔全〕ノミ、

〔休〕(孟)〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕
16 わが身はうくてかくわすられたるにこそあれ(三三2・145)

あまのかる藻に住む虫の我からとねをこそなかも世をば恨
みじ(古今集卷三、恋三、八三、題しらず 典侍藤原直子朝
臣・伊勢物語、一三・古今六帖第三、われから、三三三、内
侍のすけきよいこ)〔新〕(第三四五ノミ)

17 たゞやま人のあかきこのみひとつをかほにはなたぬとみえ給

ふ(三三・145)

あしひきの山行きしかば山人のわれにえしめし山づとぞこれ(万葉集卷十、四三、古今六帖第四、つと、三三・四)(新)
 18 かつみにそへ給ふべきみなれ衣もしはなれたれば(三三・14・149)

鈴鹿山伊勢をの海士のすて衣しは馴れたりと人や見るらむ(後撰集卷十一、恋三、七六、女の許にきぬをぬぎ置きてとり
 に遣はすとして 伊尹朝臣)〔紫(異)かつしかや…ぬれ衣
 …人やとがめん、(引)余〕

19 玉かつらたえてもやまじゆくみちのたむけの神もかけてちかはむ(三三・11・150)

① けづりとし心もしるく玉かつらたむけの神になるぞうれしき(伊勢集、一三三、物へ行く人にかつらをやるとて)

〔河〕〔引〕心もありて…手向の神と、〔休〕〔紹〕心もありて…手向の神となるがうれしき、〔五〕〔眠〕心もあかて…たむけの神と、〔拾〕〔新〕、〔余〕心もしるし、〔事〕〔大〕
 ② 君がためなでしもしるくこのたびの手向の神となるぞうれしき(未詳)〔河〕〔五〕〔眠〕

20 いのちこそしりはべらねなどいふにいつらくらうなりぬとつぶやかれて(三三・11・150)

① 命だに心にかなふものならば何か別れのかなしからまし(古今集卷八、離別、三三、源のさねがつくしへ湯あみむとて罷りける時に山崎にて別れ惜みける所にてよめる しるめ・古今六帖第四、別、三三・四、「悲しかるべき」・大和物語、

六五・和漢朗詠集卷下、餞別、六四〇)〔拾〕〔新〕(上句ノミ、

〔余〕

② えぞしらぬいま心よ命あらば我や忘るゝ人やとはぬと(古今集卷八、離別、三三、紀のむねさだがあづまへまかりける時に人の家に宿りて暁いでたつとてまかり申しければ女のよみて出せりける 読人しらず・古今六帖第四、雑の思、三三九)〔拾〕(上句ノミ、〔余〕

③ たえやせむ命ぞしらぬ水無瀬川よし流れても心みよきみ(後拾遺集卷六、雑四、二五、かたらはむといひて道命法師の許にまうできたる人のよみ侍りける 読人しらず)

〔拾〕〔新〕〔余〕

21 心も空にてひきいづればかへりみのみせられける(三三・12・150)

君がすむ宿の梢のゆくゝと隠るゝまでにかへりみしはや(拾遺集卷六、別、三三、流され侍りて後いひおこせて侍りける 贈太政大臣實)〔余〕

22

こしのしら山思ひやらるゝ雪のうちにいてゐるしも(三三・4・151)

① 君がゆくこしの白山しらねども雪のまにゝ跡は尋ねむ(古今集卷八、離別、三三、大江の千古がこしへまかりける馬のはなむけによめる 藤原兼輔朝臣)〔紫(異)〔河〕、〔紹〕(本歌までもなし)、〔五〕、〔眠〕私あながち引歌に及ばず、〔湖〕〔余〕〔全〕〔対〕〔集〕

② 年ふれば越の白山老いにけりおほくの冬のゆき積りつゝ

〔拾遺集卷四、冬、二四、題しらず 忠見・忠見集、二〇〇、しら山に雪あり〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔余〕雲のある…

おほくのとしの、〔湖〕雲のある、〔引〕

③ 消えはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞ有りける〔古今集卷六、羈旅、四四、こしの国へまかりける時白山を見てよめる 躬恒〕〔拾〕

④ 君をのみ思ひ越路の白山はいつかは雪のきゆるときある〔古今集卷六、雑下、五七、かへし 宗岳大頼〕〔拾〕〔新〕

〔余〕

23 かたもなくあれたるいへのこだしげくもりのやうなるをすぎ給ふ〔三三・14・151〕

朝な朝なわが見る柳鶯の来居て鳴くべき森に早なれ〔万葉集卷七、一五五、赤人集、一六六、一〕「時にはなりぬ」〔拾〕〔余〕

24 おほきなる松にふちのさきかゝりてつきかげになよびたるかぜにつきてさとはふがなつかしく〔三三・2・152〕

人もなき宿に匂へる藤の花風にのみこそ乱るべらなれ〔貫之集、一七六、延喜十七年八月宣旨によりて〕〔河〕〔二〕な

びくべらなれ、〔休〕君に匂へる…なびくべらなれ、〔孟〕

〔岷〕〔引歌までもなし〕、〔湖〕〔余〕〔全〕、△細△△紹△〔引歌にをよばず〕

25 ひるねのゆめにこ宮のみえ給ひければさめていとなごりかなしく〔三三・10・152〕

逢ひ見ては慰むやとぞ思ひしになごりしもこそ恋しかりけれ〔後撰集卷十二、恋四、五五、人のもとより帰りまできて遣

はしける 坂上是則・是則集、二六六〕〔余〕

26 なき人をこふるたもとのひまなきにあれたるのきのしづくさへそふ〔三三・14・153〕

ひねもすにふる春雨や古へを恋ふる袂の雫なるらむ〔高光集、一四四、母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫宮に聞えし・玉葉集卷七、雑四、三三、雅子内親王の思ひに侍りける頃雨のふる日はらからのものとへつかはしける 藤原高光〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔岷〕〔余〕

27 たづねてもわれこそとはめみちもなくふかきよもぎのものと心を〔三三・2・155〕

① 古の野中の清水ぬるけれどもこのころをしる人ぞくむ〔古今集卷七、雑上、八七、題しらず 読人しらず〕〔新〕

〔下句ノミ〕

② いかでかは尋ね来つらむ蓬生の人も通はぬわが宿の道〔拾遺集卷六、雑賀、三三、題しらず 読人しらず・高光集、元四七、多武峯に住む頃人のとぶらひたる返事に〕〔余〕〔事〕

28 あまそゝきも猶秋のしぐれめきてうちそそけば〔三三・3・155〕

東屋の 真屋のあまりの その 雨そそぎ 我立ち濡れぬ 殿戸開かせ かすがひも 錠もあらばこそ その殿戸 我

鎖さめ おし開いて来ませ 我や人妻〔催馬楽、東屋、六

〔対〕〔評〕〔集〕

29 秋のしぐれめきてうちそそけば御かささぶらふげにこのした露はあめにまさりてときこゆ〔三三・4・155〕

みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまさり

〔古今集卷三、東歌、陸奥歌、二〇六・古今六帖第一、露、三
四三、「みさむらひ」〕〔釈前〕、〔釈書〕雨にまさりて、〔奥
上句ノミ〕、〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔第四句ノミ〕、〔二〕〔細
大〕〔評〕〔集〕

30 御さしぬきのすそはいたうそをちぬめり 〔三六五・一五五〕

※そをちぬめり―そぼちぬめり青御為肖―そぼつめり河

心から花の雲にそぼちつゝうくひずとのみ鳥の鳴くらむ
〔古今集卷十、物名、四三三、うぐひす、藤原敏行朝臣・敏行
集、二六五・古今六帖第一、雲、三四四〕〔河〕〔孟〕

31 すぎならぬこだちのしるさにえすぎでなむまけきこえにける
とて 〔三六四・一五五〕

①我が庵は三輪の山もと恋ひしくはとぶらひ来ませ杉立てる
門 〔古今集卷六、雑下、六二、題しらず 読人しらず・古
今六帖第三、かど、三三四、三輪の御歌、「わが宿は」・同第
六、すぎ、三二九、「とぶくきませ」〕〔紫〕〔異〕⑦〔河〕恋

しくはとぶらひきませ我が宿は三輪の山もと、〔異〕⑦わ
が宿は、〔紹〕〔引歌よくも不合、〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新
余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②三輪の山しるしの杉はかれずとも誰かは人の我を尋ねむ
〔古今六帖第五、人をたづね、三三五・続後撰集卷十、恋三、
三六、題しらず 読人しらず、「わかすとも」第三句〕〔花
休〕〔岷〕うせずとも第三句、〔屋〕

③我が宿の松はしるしもなかりけり杉むらならば尋ねきなま
し 〔今昔物語集、二四四〕〔花〕〔休〕〔岷〕

32 としごろのをこたりはたなべてのよにおほしゆるすらむ 〔三三
五・一五七〕

あすか川我が身一つの淵瀬ゆへなべての世をもうらみつる
かな 〔後撰集卷七、雑三、三三三、題しらず 読人しらず〕

〔余〕

33 いひしにたがうつみもおうべきなどさしもおぼされぬことも
〔三七七・一五七〕

①いとゞこそまさりにまされ忘れじといひしにたがふ事のつ
らさは〔未詳〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕、〔休〕いとゞしくう
きこそまされ、〔紹〕〔孟〕〔屋〕、〔岷〕人のつらさは、〔湖〕

〔引〕〔拾〕〔余〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

②思はむと頼めし人はありと聞くいひし言の葉いづちにけ
む 〔後撰集卷十、恋三、人の心かはりにければ 右近〕〔余〕
ひきうえしならねどまつのかだくなりけるとし月のほと
も 〔三三〇・一五七〕

ひき植ゑし人はむべこそ老いにけれ松の木高くなりける
かな 〔後撰集卷十、雑一、二〇六、淡路のまつりごと人の任
はてゝのぼりまうできての頃兼輔朝臣の粟田の家にて 躬
恒・古今六帖第五、昔あへる人、三五六、「昔見し人は宜し
も老いにけり」・躬恒集、三三三、淡路のぞうの任はてゝ京
に上りてその頃兼輔の中納言の家にて、「引きて植ゑし」
〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔八弄〕、〔二〕〔上句ノミ〕、〔細〕〔休〕〔紹〕

〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕
〔集〕

35 ふちなみのみちすぎがたくみえつるはまつこそやどのしるし
なりけれ (五言12・157)

住吉のきしもせざらむ物故に妬くや人に待つといはれむ
(拾遺集卷十、神楽、五言) (花)〔休〕〔紹〕〔孟〕

36 ひなのわかれにおとろへしよのものがたりもきこえつくすべ
き (五言14・157)

思ひきやひなの別れにおとろへて海人のなはたきいさりせ
むとは(古今集卷六、雑下、五言、隱岐の国に流されて侍り
ける時によめる 簀朝臣・古今六帖第四、別、三言) (花) (弄) (た
むら) (あまのなはたく) (釈書) (紫) (異) (河) (休) (紹)
〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕
〔集〕

37 むかしにかはらぬ御しつらひのさまなど忍草にやつれたるう
へのみるめよりは (五言7・158)

君しのお草にやつるゝふるさとはまつ虫の音ぞ悲しかりけ
る(古今集卷四、秋上、三言、題しらず 読人しらず・古今
六帖第六、まつむし、五言) (孟) (河) (岷) (引歌にはあら
ず) (引) (かなしかりけれ) (余) (全) (対) (事) (評) (集)

関屋

1 つくばねの山をふきこす風もうきたる心ちして (五言4・
163)

① 筑波ねの峯より落つるみな川の恋ぞ積りて淵となりける
(後撰集卷十一、恋三、五言、釣殿のみにこに遣はしける 陽成
院御製・古今六帖第三、川、三言) (淵となりぬる) (釈
前) (みなをがは) (釈書) (峯よりいづるみなせ川) (淵とな
しける) (奥) (下句ノミ) (紫) (異) (河) (孟) (岷)

② 甲斐が根をねごし山ごし吹く風を人にもがもやことつてや
らむ(古今集卷十、東歌、甲斐歌、二言) (花) (弄) (下
句ノミ) (一) (細) (休) (紹) (孟) (屋) (岷) (湖) (引) (新)、
〔玉〕 (第二句ノミ) (余) (全) (対) (事) (大) (評) (集)

2 とのはあわた山こえ給ひぬとて (五言10・163)

粟田山こゆともこゆと思へ共猶逢坂は遙けかりけり(古今
六帖第三、山、三言) (河) (休) (紹) (孟) (岷) (湖) (余)

3 御せむの人くみちもさりあへずきこみぬれば (五言10・163)
梓弓春の山べをこえくれは道もさりあへず春ぞ散りける
(古今集卷三、春下、二言、志賀の山こえに女の多くあへり
けるによみて遣はしける 貫之) (河) (孟) (湖) (余)

4 せき山にみなおりてこゝかしこのすぎのしたに (五言11・
164)

関山の峯の杉村過ぎ行けどあふみは猶ぞはるけかりける

(後撰集卷十二、恋四、六六、ある人のむすめあまたありけるを姉よりはじめていひ侍りけれどもかざりければ三にあたる女に遣はしける 読人しらす) [河]過行は(不本と、はい傍書)、(休)過ぎ行くは、(孟)(岷)

5 ゆくときとせきとめがたき涙をやたえぬし水と人はみるらむ (孟)10・164)

①関てえて栗津の森のあはずとも清水に見えしかげを忘るな (後撰集卷十二、恋四、六三、あひしりて侍る人の近江の方へまかりければ 読人しらす) [河](休)(紹)(岷)

②あかずして別るゝ涙滝にそふ水増るとやしたは見ゆらむ (古今集卷六、離別、五六、仁和の帝みこにおはしましける時にふるの滝御覧じにおはしまして帰り給ひけるに詠める 兼芸法師) [弄](休)(紹)、(岷)しもは見ゆらむ

6 わくらばにゆきあふ道をたのみしも猶かひなしやしほならぬうみ (孟)8・165)

しほみたぬ海ときけばやよとにもみるめなくして年のへぬらん (後撰集卷六、恋一、五九、ある所にあふみといひける人のもとにつかはしける 貫之) [河](休)塩ならぬ、

(花)八一(紹)(岷)(湖)(余)

7 あふさかの関やいかなるせきなればしげきの中をわくらん (孟)3・166)

①あふ坂の関やなか／＼近けれどこえわびぬれば歎きてぞふる (蜻蛉日記、六) (余)

②思ふてふ我が言の葉をあだ人のしげき歎きにそひてうらむ

な (蜻蛉日記、六) (余)

8 いかでこの人の御ためにのこしをくたましひもがな (孟)10・167)

①あかざりし袖の中にや入りにけむ我が魂のなき心ちする (古今集卷六、雑下、五五、女ともだちと物語し別れて後につかはしける みちのく) [河](岷)

②子のために残す命もへてしがな老て先立つ否びざるべく (兼輔集、一六六、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言) [花]八弄、(一)(紹)(孟)(湖)(引)(余)悔なかるべき第五包、(休)残す命をくくぬなかるべく

9 みひとつのうきことにてなげきあかしくらす (孟)14・167)

大方のわが身一つの憂きからにすべての世をも恨みつる哉 (後撰集卷十二、雑三、題しらす 読人しらす・拾遺集卷十二、恋三、五三、題しらす 貫之) [弄](休)(紹)

10 あいなさかしらやなどぞはべるめる (孟)7・168)

①さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが独りぬる (古今集卷六、雑体、誹諧、二四、題しらす 読人しらす・古今六帖第一、霜月、三二六・同第三、ひとりね、三五五)

(河)(岷)

②秋の野に行きてみるべき花の色をたがさかしらに折てきつらん (古今六帖拾遺、三三三) (河)(休)(岷)